

# 「TFU 教育フォーラム 2022」 記録集

2022 年 12 月 3 日（土）  
（対面・オンライン開催）

主催：東北福祉大学教育学部/東北福祉大学大学院教育学研究科  
後援：宮城県教育委員会/仙台市教育委員会/河北新報社



## 【TFU 教育フォーラム 2022 概要】

### 1. 2022 年度テーマ

「ポストコロナへの志向——すべての子どもの確かな学びをめざして（第2年次）」

### 2. 大会趣旨

コロナ禍における保育や授業実践において、教育現場では「新しい生活様式」に順応させるために、これまでに想定していなかった苦慮をされ、その中でも様々な配慮や工夫をしながら教育活動を行われているものと思われる。

そこで、11 回目となる本フォーラムでは、昨年度に引き続きそれぞれの現場における工夫された実践等について、話題を提供していただく。その上で、子どもの確かな学びに向け、近い将来のポストコロナを見据えた新たな学びのスタイルを模索していきたい。

### 3. ねらい

- 1) 卒業生を対象に、日頃現場の中で感じている多様な悩みなどについて、実践を基にして解決の方策を共に探ることを目標に、卒業生のリカレントの機会とする。
- 2) 大学と卒業生等及び現職教員との交流を図ることで、現場での課題の解決策を共に見いだす。
- 3) 在校生が保育・教職への理解を深めることを通して、その資質向上に寄与する。
- 4) コロナ禍における学びの持続性を追究する。

### 4. 日時・時程

(1) 日時 令和4年(2022)12月3日(土) 13:00～16:00

(2) 時程

12:30	13:00	13:30	16:00
受付	開会行事	校種(教科)別分科会 第1:幼保      第2:小学校A 第4:中高(社会) 第5:中高(英語)	第3:小学校B 第6:特別支援

### 5. 実施方法

対面(本学国見キャンパス教室)及びオンラインによるハイフレックス方式

< 挨拶 >



## フォーラムが学び直しのきっかけへ

東北福祉大学 教育学部

学部長 石原 直

教育フォーラム開催に当たって、ご挨拶を申し上げます。

このフォーラムもおかげさまをもちまして、11年目となりました。卒業生のリカレントと在校生の学びを目的とし、これまでも多くの成果を上げているのも、ご参加いただいた皆様のおかげであると感謝申し上げます。

さて、1949年に日本人で初めてノーベル賞を受賞した「湯川秀樹博士」の著書に「創造性とは、ある一定の順序立てられた知識の上に発揮される」という一節がございます。私はこの一節を次のように解釈しております。

創造性というと、突然ひらめいたり、人と違ったり奇抜なものではないかと思う方がいるかと思えます。

例えば、岡本太郎先生の大阪万博の際の「太陽の塔」やガウディーの「サグラダ・ファミリア教会」などは、最初はとても変わったものに見えたりします。しかし、その作品が崩れたりしないような土台や基礎はしっかり考えられているでしょうし、そこに込められた意味や成り立ちを知れば、納得したり、賞賛したりします。

湯川博士の言う「ある一定の知識」とは、基礎・基本となる知識であり、その知識が土台となり、順序立てられたものであるからこそ、その上に、創造性が花開くのだと考えています。

基礎ができているから新しいものが生み出せるのではないのでしょうか。

また、私は知識は道具でも考えています。

例えば、家を建てる時、のこぎりやかんなが必要であるように、問題を解決するのに使う知識や技能は道具だと考えています。

良いのこぎりがないければ、木は切れないし、良いかんながないければきれいに削れません。

同じように、良い知識や技能を持っていないければ、問題を解決することはできません。

この良い知識や技能を見極め、子どもたちにしっかり獲得させるのが教員の役目だと考えています。

そして、さらに大切なことは、湯川博士の言う順序立てられた知識、すなわち系統立てられた知識であり、それを学ばせるのも、私たち教員の仕事です。

本日のフォーラムが、参加者皆さんにとって、良い知識や技能を獲得する機会となり、日々の授業に反映できるようになっていただければ、幸いです。

最後になり失礼かと存じますが、本フォーラムにご参加いただく皆様、本学関係者、そして、これまでの準備や今日の運営などを受け持っていていただいている関係者の皆様に感謝申し上げます、挨拶とさせていただきます。



## これからの時代をたくましく生きていくために 求められる資質と能力

東北福祉大学 教育学科

学科長 大西 孝志

私たちが新型コロナウイルス感染症という新しい病気を知ってからまもなく 4 年になるうとしています。現在学生の皆さんは多くの制約の中で学業や部活動等の大学生活を経験してきた世代です。本 TFU 教育フォーラムは中止の年があったものの昨年度はテレビ会議システムによるオンライン開催、今年度はオンラインと対面の同時開催方式で継続することが出来ました。

さて、令和 3 年 1 月に中央教育審議会から出された答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」では、すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現ということが述べられています。

「すべての子供たち」というのは、通常の学級の子供たちに加え、障がいのある子供、不登校等、何らかの事情で登校することができない子供、外国籍等で日本語の理解が出来ない子供、LGBTQ の子供等、多様な子供達を想定しています。これまでは少数派（マイノリティ）であるため、取り残されてきた者を見逃さないようにという強い決意が示されています。

「個別最適な学び」というのはこれまでの学びの上に ICT 等の活用を取り入れることによる効果的な学びということです。「協働的な学び」というのは、一人で考えるのではなく、多様な考え方や経験を有する他者との学び合うことを指しています。

これらを通して「生きる力」を育てていくことが学校教育の目指すところであり、この力が子供たちに身に付けさせるべき「資質・能力」となります。

少し前の話になりますが、コロナ禍の少し前に話題になった漫画に「鬼滅の刃」がありました。大ヒットの理由はいくつかありますが、先行きが不透明な時代に問題解決を迫られるという点では今と共通点がありました。主人公が「個別最適な学び」「協働的な学び」を通して、直面した問題を解決するという点は、先ほどの答申と共通する部分があります。これまでの経験では答えを見つけることが出来ない「鬼になった妹をどうやって人間に戻すのか」「大きな岩を刀で切るためにはどうするのか」という難しい問題に対峙した炭治郎は、一人山にこもってトレーニングを行い「基礎・基本」を身に付けました。これが個別最適な学びです。解決できない問題は多くの仲間と話し合い、対話によって解決しました。これが協働的な学びです。

子供たちが将来、どのような問題に出会っても、それをなんとか解決し、次に進んでいくためには、皆さん一人一人の指導力で子供たちに「資質・能力」をプレゼントする必要があります。本フォーラムで感じたことを是非これからの学びにつなげ、ご自身の専門性を高めていただきたいと思います。

終わりになりますが、本日の開催にあたりお力を貸してくださった、講師、助言者、卒業生、そして学生スタッフの皆さんに感謝申し上げます学科長の挨拶といたします。



## 「教育フォーラム 2022」の開催を祝って

東北福祉大学大学院教育学研究科

研究科長 朝倉 充彦

本日は、「TFU 教育フォーラム 2022」に多数の方々にご参加いただき、感謝申し上げます。

本教育フォーラムも今回で 11 年目を迎えます。これまで内外の講師をお招きして、その卓見を拝聴するとともに、教師として活躍している多くの卒業生から教育現場の生の声を聴く貴重な機会をもつとともに、卒業生にとってもリカレント教育の場ともなってきました。今大会も多くの方のご尽力によりそうした機会が設けられましたことは本当に喜ばしいことです。

さて、現在、新型コロナウイルス感染症拡大の中、その収束の兆しが見えない状況にあります。このような状況が社会や経済だけでなく、教育の現場にも大きな影響を及ぼし、教育の在り方が問われていると言っても過言ではないでしょう。20 世紀初頭のアメリカの教育学者ジョン・デューイが述べたように、学校は「小さな社会」であり、社会生活という大きな全体の一部です。社会生活の変化に学校も対応することが必要であると述べていました。日々変化する社会に対応するために、学校教育の数々の課題が山積しています。

現在も続くコロナ禍での子どもの「学びの保障」をどうするかという点から学校教育ならではの学びとは何かが問われています。また、GIGA スクール構想の実現が掲げられ、ICT 活用指導力や ICT 環境整備が学校、教師に求められています。この GIGA スクール構想の中で、「学びの転換」が叫ばれ、「個別最適な学びと、協働的な学びとをどう実現するか」という課題に教育現場はどう応えるかが求められています。

しかし、「不易と流行」という言葉があるように、社会の変化とともに変わるもの・変わるべきものがある一方、変わらないもの、あるいは変わってはいけないものもあります。変わらないもの・変わってはいけないものが教育の本質というものでしょう。その教育の本質は何か、これこそ教育者が日々の教育の中で考え追い求めていくことと言ってもいいでしょう。

この「教育フォーラム」は、以上のような数々の教育課題をともに考え、解決の糸口を見つけるとともに、それを教育現場に反映させていくという、研究と実践の往還的な場となることを期待しています。

今回の教育フォーラムにご参加いただいた皆様にとって、フォーラムで得た様々な知見がご自身の指導力となることを祈念しております。

最後に、この教育フォーラム開催のためにご尽力いただいた先生方や学生の皆さんに感謝申し上げます。

# 目 次

教育フォーラム 2022 概要

挨拶

分科会記録

第 1 分科会（初等教育・幼保） .....	1
第 2 分科会（初等教育・小学校 A） .....	7
第 3 分科会（初等教育・小学校 B） .....	14
第 4 分科会（中等教育・中高社会） .....	18
第 5 分科会（中等教育・中高英語） .....	24
第 6 分科会（特別支援教育） .....	31
総 括 .....	38
TFU 教育フォーラム学生実行委員名簿 .....	40
TFU 教育フォーラムのあゆみ（2012 年度～2022 年度） .....	42
編集後記 .....	44



## 第1分科会（初等教育：幼保）

### <第1分科会記録>

司会：今野 さくら、長澤 柊寧

参加者 卒業生：1名、一般：3名、在学生 241名、本学教員 8名、計 253名

第1分科会では4年学生「発達プロジェクト」からの発題に対し、講師2名から講評を頂き、参加学生との質疑応答、プロジェクトメンバーとの応答等の交流が行われた。



1. 大原 慎 先生（2000年度社会福祉学科卒 泉チェリーこども園）大原先生は、子どもの非認知能力について『思いやりの心』と『やり抜く力』をテーマに、それぞれ3歳未満児・3歳以上児の事例を用いながら、数値やテストでは測りきれない子どもの非認知能力を育む保育やその能力を育むために乳幼児期に必要な経験とは何かをご講評いただいた。

#### 質疑の様子

大原先生の講評の際に扱われた事例について、学生から「大原先生がその場にいたら子どもに対してどのような言葉をかけるか」という質問が挙がった。それに対して、今回の講評のテーマの『思いやりの心』や『やり抜く力』と関連付けながら、長年現場でご活躍されてきた経験をもとに、「なんで？」と子どもの気持ちを聞くことや共感を示すことが大切であると話した。楽しい・発見・やってみたいが子どもにとって大事なことであり、保育者も子どもと同じ視点でそういった気持ちを持つことが重要であると語った。



2. 鎌田克信先生（本学総合福祉学部 福祉心理学科講師）鎌田先生は、小学校教諭として勤めた経験があることから、非認知能力に対する小学校教諭からの視点でご講評いただいた。その中でも、『子ども観』が大切であり大人が子どもを無条件に愛していくことで、その愛される実感が気持ちの土台となり自ら環境に働きかけることができるのだと話した。

#### 質疑の様子

鎌田先生の講評で『子ども観』が大切であると語ったことに対して、学生から「子どもの持っている素敵な力を認めることが難しい教員や保護者もいる」という意見が出た。それに対して「教員や保護者にも色々な考えがあるため、お互いの考えが合わないことがあるが、子どもの成長は皆が求めている」と考えが合わないことよりも合う考えに目を向け、そのうえで子どもの変化や成長の過程をしっかりと伝え合っていくことでお互いのまなざしを重ね合わせていくことが大切であると語った。

#### 感想

大原先生と鎌田先生のご講話を聞き、保護者や保育者など子どもを取り巻く大人の子ども観や働きかけの大切さを実感した。今後保育に携わる立場として今回の学びを活かし、子どもの世界を一緒に楽しむことを大切にしていきたい。（3年 小川 千穂・佐藤 花南）

非認知能力を育む保育～乳幼児期に必要な経験とは

19ET009 阿部ちひろ 19ET023 石田千夏 19ET040 大槻優希子  
19ET057 金澤佳織 19ET159 高橋玲 19ET171 富田あやの

1. テーマ設定の背景

TFU 保育士課程における学生プロジェクトのひとつ「発達プロジェクト」において、保育士課程4年生を対象とした「教育実習（幼・小）の事前事後指導」の中で、乳幼児期の様々な発達をレクチャーする「発達特別講義」を行った。その準備段階で、担当教員から非認知能力が近年注目されているという話を伺ったことがきっかけとなり、具体的に非認知能力とはどのような能力なのか、乳幼児期に育むことの重要性等について理解し、その能力の発達を促すための保育を学びたいというメンバーの思いから今回のテーマ設定に至った。

2. 研究方法・内容

まず、非認知能力とは何か、非認知能力が注目された背景などについて文献調査を行い、非認知能力についての基礎的な理解を深めた。非認知能力とは、読み書き・計算などの数値では測れない能力のことで、協調性、粘り強さ、積極性、意欲など、生きていくために必要な力を指す。非認知能力に含まれるすべての資質について学びを深めることは難しいと考え、今回は「思いやり」と「やり抜く力」2つの力に絞り研究を進めることとした。

実習等の体験をもとに2つの資質に関連する保育の場面や子どもの姿、出来事を出し合い共有した。あわせて、保育所保育指針において関連する記載について調査した。また、保育現場で働かれている大原慎先生（泉チェリーこども園）から「思いやり」と「やり抜く力」の2つの力が育まれるような子どもの経験についての事例を紹介していただいた。

また、養護教諭養成に携わっている鎌田克信先生（東北福祉大学）より学校教育の観点から、「思いやり」と「やり抜く力」を促す関わりについて、さらには保育や幼児教育に期待する事柄についてご助言をいただいた。これらの学びを通して、幼児の具体的な姿から「思いやり」や「やり抜く力」を理解する際の視点やこれらを促す保育者の関わり方について考察し、非認知能力を育む保育についてまとめた。

3. 考察

(1)思いやりの力

思いやりの力を育むための大前提として多くの人と関わることへの興味や子ども自身が嬉しいと感じる経験をすることが大切だと考える。そして大人をモデルとして思いやりのある言動を学んでいくため、保育者自身の言動が重要となる。また、保育者は子どもの思いやりのある行動を認めることが大切である。「お花さんが嬉しそう」など子どもから思いやりのある言葉が発せられた際には、その言葉を聞き逃さず受け止め、承認するような言葉

をかけることが思いやりを育んでいくために必要である。時には思いやりが相手にとっておせっかいになることもあるが、保育者はその子がなぜそのような行動をしているのか、その子の背景を理解しようとするのが 大切である。

#### (2)やり抜く力

やり抜く力は、興味のあることを「やってみたい」という気持ちから自分で考え、工夫をして遊びを深めたり、友達と協力したりしてやり遂げる経験が大切である。保育者は子どもの遊びが展開するように遊び方を提示したり一緒に遊びを楽しんだりと意図的に関わることも大切であると考え。そして、保育者は、子どもが達成感や自信を持つことができるようにやり遂げるまでの過程を具体的に認めることでやり抜く力に繋がると考える。

#### 4. まとめ

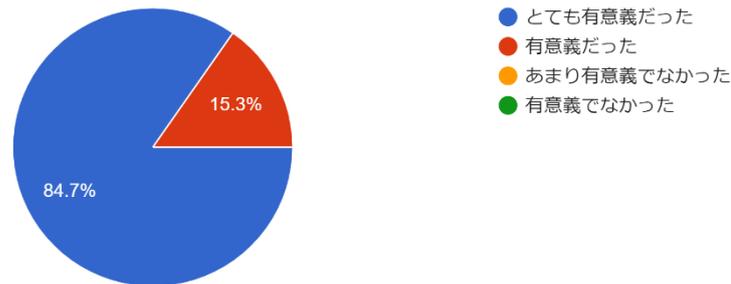
非認知能力を育むために乳幼児期には、友達と思いが通じ合うことの嬉しさやトラブルで味わう葛藤、何かをやり抜くことの達成感、自分が認められることの安心感など多様な経験から生まれる感情を十分に味わうことが 重要だと考えた。保育者は、子どもが持っている様々な力を引き出すために、常に子どものモデルとなること、目の前の子どもに合わせた援助や環境構成、「貴方は貴方のままでいい」という子どもを愛する気持ちが不可欠であると考え。保育者の丁寧な関わりを通して、子どもは自己肯定感を高め、自他を大切にす感情が芽生える。それが非認知能力を育む保育に繋がると考えた。

## 第1分科会 アンケート結果

### 1 学生の発表は有意義だったか

学生の発表について、当てはまるものをお選びください。

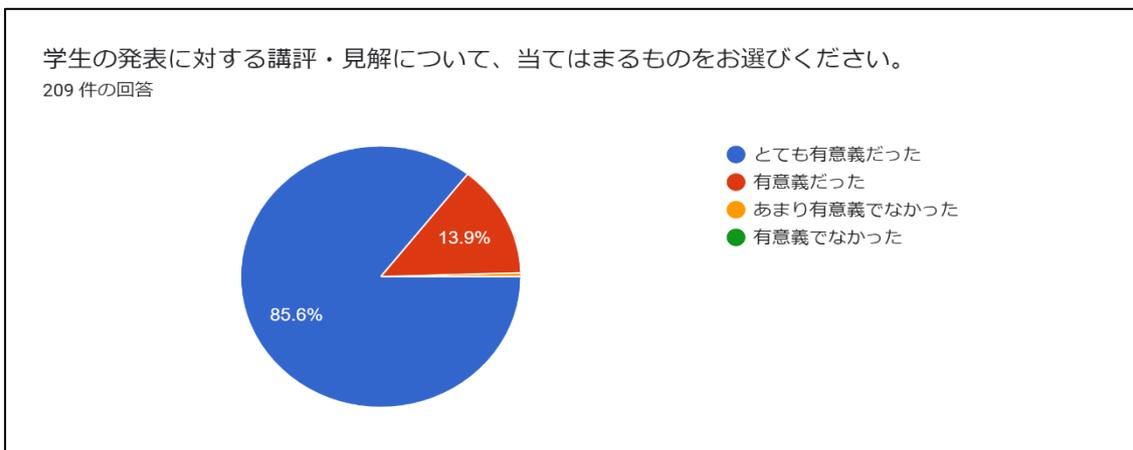
209件の回答



#### 〈ご意見〉

- ・発題の意図や過程が順序だてられており、前情報や目的を理解して臨むことができました。自分の中で「どうしようかな」と考える程度で止まってしまっていた議題だったため、今回そこを深く学ぶことができ良かったです。
- ・スライドがわかりやすく、実習先で気になった子どもの行動の情報交換をし、ではどうしたらよかったのか、その子の行動の意味は何なのかを学生で話し合う機会があることがもっと学びを深めることができると思いました。それをこれから実習に行く私たちにも共有してもらえることがとてもありがたく感じました。
- ・非認知能力が大切だと授業の中でよく話を聞きますが、具体的に保育所指針などを例に出しながら大切な理由を教えていただいたので、納得のできる有意義な時間になりました。乳幼児の頃の経験が、大人になっても影響していると学んだため、将来保育者として働く際は、責任を持ちながら保育をしようと思いました。
- ・非認知能力がどれくらい重要なものであるかが分かったと同時に、思いやりの心を持つことを保育者が子どもたちに伝えることでその様子を見た子どもたちがほかの子どもへと伝染していくものなんだと思いました。また、その思いやりから子どもたちは自分で気づき学んで、保育者の見えない思いやりで何かをやり抜く力へと発展していくと思いました。今回の学びでは、思いやりや、やり抜く力は、表裏一体の関係性にあるのではないかと感じました。
- ・思いやりなのかお節介なのか迷う場面、見守ることが正しいのか迷う場面はあるだろうと思うし、私自身も疑問に思っていたため興味深く聞くことができた。また、非認知能力は雪だるま式に大きくなるという研究データがあるということで、早い時期から身につけることの重要性を学ぶことができた。

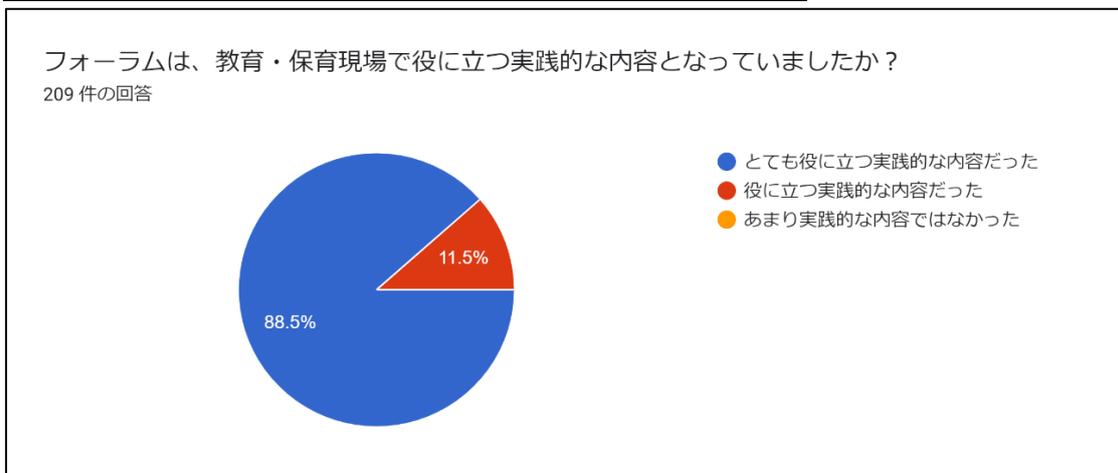
## 2 学生の発表に対する講評・見解について



### 〈ご意見〉

- ・実際の事例を通して、思いやりが時にはおせっかいになり得ることや最後まで物事をやり抜く姿勢の重要性を学びました。そういった中で保育者が環境構成を工夫することで子どもたちに学びの場を提供することに繋がると知り、環境を工夫することの大切さや子どもにあえて用具があることを伝えず自分たちで気付かせることを学びました。
- ・事例を用いた講評で、「自分がもしその場にいたら違う行動をしていたらうな」と自分を客観視しながら、自分には思いつかない子どもの関わり方とその効果について学ぶことができ、とても勉強になりました。
- ・実際に大原先生が経験した事例を踏まえながら「思いやり」や「やり遂げる力」について説明していただき分かりやすく学ぶことができた。保育者は、子どものモデルであるということを常に頭において子どもと関わるのが重要であると感じた。鎌田先生のお話の中では、遊びや好きなことにまで成長を求めてしまっているという言葉が印象に残った。「遊びを通して学ぶ」ことが重要だと講義でも学んでいたが、子どもに学びや成長を求めて遊びをさせることは違うなと考えさせられた。
- ・大原先生の講評では保育者が子ども一人ひとりを大切に、思いやりのある行動をするモデルとなることや感情や相手の視点に気づくような働きかけをすることが大切だと分かりました。またやり抜く力を育てるにはただ見守るだけでなく意図のある主体性につながる声掛けが重要であることも学ぶことが出来ました。鎌田先生の講評では「愛される実感」が気持ちの土台になり自ら環境にはたらきかけることが出来ることがわかりました。うまくできたから褒めるのではなく、その子の存在自体を愛することがとても大切だと学ぶことが出来ました。

### 3 フォーラムは教育・保育現場で役立つ実践的な内容だったか



#### 〈ご意見〉

・事例がとても多く、イメージしながら聞くことができました。私がもしその場面に居たらどう対応するかなど自分に置き換えてお話を聞かせていただいたのですが、今の私には思いつかないような対応や言葉掛け(見守る対応など)を聞くことができ、とても有意義にお話を聞くことができました。

・スライドを用いて聞くだけでなく、視覚的に分かりやすい発表になっていると感じました。事前にスライドを配布していただいたことで内容の予習ができましたし、後から振り返ることもでき有意義な学びを継続することに繋がると感じました。今回は昨年と異なり実習を経験してから臨んだため、数多くの事例が自分も経験したことのある共感できるものだったこともあって深い学びになりました。

・非認知能力における「思いやり」や「やりきる力」について、今日のフォーラムに参加することで改めて自分でも考える機会となり、とても勉強になりました。お話の中にあつた「誰のための保育なのか」という言葉がとても印象的でした。この活動を行う意味は何か、この援助の仕方ではどんな力が育まれるのかなど、自分の行った保育や関わりの振り返りと改善を繰り返し、保育士として働く際にも大切にしようと思いました。

・今回の教育フォーラムを通して、学生の発表や先生方の講評・見解、またそれに対する学生からの質問など、様々な視点から考え理解を深めることができました。事例1つについて深めていく中でも、それぞれのもつ価値観や保育に対する考え方、保育所で大切にしている目標や方針によって対応は異なり、答えは1つではないと感じました。選択肢が多くあるからこそ、今その時の子どもの姿よく観て考えながら関わるため、子ども理解に繋がると考えました。今回の学びや新たな視点を、今後活かしていきたいと思います。・事例などを元に、そのような場面でどのような対応ができるのか、どんな配慮や環境構成が求められるのかなどを聞いて、新たな視点や考えが広がり、更に自分の考えを深める良い機会となりました。また、小学校入学後やそれ以降のことも考えると、乳幼児期の過ごし方がどれだけ大事なのかを改めて感じました。

## 第2分科会（初等教育：小学校 A）

第2・第3分科会 合同講演会記録

司会：森 宝、佐藤 朝夏

GIGA スクール環境下で進む授業改善の方向性

～先生が教える授業から子供が学び取る授業へ～

菅原 弘一（仙台市立錦ヶ丘小学校校長・文部科学省 ICT 活用教育アドバイザー）



ご講演いただいた菅原弘一先生は、仙台市立錦ヶ丘小学校に勤務され、主に ICT 機器を活用した教育方法について研究を続けられてきた。

TFU 教育フォーラムでは、GIGA スクール構想で、どのように学習環境が変化しているのか、ICT 機器を使った児童中心の主体的な授業方法について講演をしていただいた。

### 質疑の様子

講演終了後、二人の学生から、質問が上がった。

一人目の学生は、「一人一台端末の ICT 機器であることから、ローマ字入力を学習していない小学校 1 年生 2 年生はどのように活用しているか」についての質問だった。これに対し、菅原先生は、小学校 1 年生や 2 年生も ICT 機器を授業内で活用していると回答した。活用方法としては、学生の質問内容に合った通り、ローマ字入力にはできない。しかし、自分の考えを書いたノートを写真でとって友達と共有するといった学習支援ツールとして活用している。また、仙台市の取り組みとして、手書き入力によって、指やペンで書いたり、ソフトキーボードを使ったりしている。

二人目の学生からは、「学習としてのツールだけではなく、広く活用することはできないのか」という質問であった。これに対し、菅原先生は学習の捉え方を変化させることを説明した。本来、学習とは教科書だけで学ぶのが学習ではなく多くの人と関わりながら成長することも学習であると話した。そのため、自分の学習がより豊かにすることが、導く先であると話した。

### 感想

講演を聞いて、これからの教育で特に二つのことを考えた。一つ目は教師自らの学び続ける姿勢を持つことである。将来、教壇に立つ一人として知識を吸収するハングリー精神を常に持ち合わせていきたい。二つ目は ICT 機器によって児童の思考整理を支援し、課題解決学習がより充実したものとなることである。講話内の先生が作成したスライドを児童が自主的に動かしてわかりやすくしているのが印象的だった。そのため、ICT 機器は一斉授業内の個別指導を豊かにする支援ツールだと考えた。 （3年 林 優衣、小野寺 可純）

## GIGA スクール環境下で進む授業改善の方向性

菅原弘一（仙台市立錦ヶ丘小学校校長）

### 1. 仙台市立錦ヶ丘小学校における GIGA スクールの取組み

本校は令和3年度より「仙台市 GIGA スクール推進校」として、1人1台端末活用の日常化を目指してきた。情報端末の家庭への持ち帰りも行っている。

令和4年度の課題は、「機器操作の習得」から「情報活用能力の発揮」への移行であり、校内研究のテーマを「充実した対話を支える情報活用能力の育成」と設定し、先生が「教える」授業での ICT 活用から、子供自身が主体的に「学びとる」ための ICT 活用へと重点を移し、授業改善を試みている。

特に、社会科や総合的な学習の時間など、「調べる」活動が多い教科等や、家庭科など家庭や地域での実践が求められる教科等では、情報を集めて整理して伝える学習の過程で、子供自身に ICT の活用を任せて情報活用能力を発揮する機会をつくるなどの工夫を試みている。

### 2. 子供が ICT を活用して学び取るための学習指導へ

5年社会科「寒い土地のくらしの」授業では、家庭においても多様なコンテンツにアクセスして情報を収集できる環境を生かし、教科書の内容を概観した上で個人課題を設定し、調べてみたい事柄について3日間かけて、家庭でじっくり調べるよう子供に任せてみた。

従来の単元構成に家庭での調べ学習を挿入しただけのように思えるが、学校での授業が、「調べる」ことを中心とした時間から、家庭で調べた多様な情報を持ち寄って自分たちで「整理して考えながら学び取る」時間へと変化している。

調べる手順は、クラウドサービスを参照して常に確認でき、ノートはデジタル化されて共有が容易になっている。学校の授業では、各自の意見の違いや類似点を見つけたりしながら、「北海道の農業にはどのような特色があるのか」という課題に対する自分たちなりのまとめを、共同編集作業で作り出していく。クラウドサービスの利用によって学習の成果が家庭から学校へと連続的に引き継がれ、課題の解決のために情報活用の力が発揮される学習になってきている。

### 3. 児童に表れてきた変化と今後の課題

子供に任せる割合を増やしてきたことで、情報の収集や整理の力が付いてきた。これから課題となるのは、調べてまとめた結果に対して、質問や意見を交わすなど対話を通して考えを深め、更なる疑問についてもう一度家庭で調べるなど、学校と家庭の学習の一層の循環を実現することである。

GIGA スクールの環境は、子供たちが自律的に学ぶ力をつけていくことと深く関わってくる。今後も、情報活用能力の育成や家庭との連携を視野に授業改善を試み、「先生が教える授業」から「子供が学びとる授業」への転換を進めながら、一人一人が自律的に学ぶ力を高めることができるようにしていきたい。

## <第2分科会記録>

司会：森 宝、佐藤 朝夏

参加者 卒業生：4名、一般：4名、在学生 87名、本学教員4名、計99名



1. 遠藤学先生（2010年度卒）遠藤先生は、13年目で確かな学びを目指し、小学生のiPadの活用と深い学びについて取り上げた。iPadを社会科や算数科などの教科で活用し子供達の思考力を高めたり、運動委員会が競技のコツを配信したりすることで間接的に異学年との交流を図っていた。様々な場面で学習課題に合わせた活用を行っていると報告した。

### 質疑の様子

遠藤先生がICT化してきた中で一番ICT化しづらかったこと、もっとできそうなことは何かという質問があった。回答として、「総合的な学習の時間」で困難だった点について、授業内で作成したスライドを他校や他クラスに発信する際、発表の時に近くで話さないと声が聞こえず、スピーカーがないと音声が届かない事や、Wi-Fiの通信環境の関係で聞こえづらくなる点を挙げていた。ICT活用は子供達の中でできる指導は沢山あるが、実際にやってみないと分からない課題が沢山あることに困難を抱えていると話していた。



2. 村上綾花さん（2020年度卒）村上綾花さんは、大学院修士2年で、研究内容である「教育実践におけるSDGsの現状と課題」について取り上げた。パワーポイントによるSDGsカードの作成から有効性の調査を行い、現時点までの実践を報告した。また、大学院の魅力は学びをアウトプットすることで、さらに学びを広げることができることだと語った。

### 質疑の様子

「SDGsはどのような教科で扱うとよいのか。」という質問があった。回答として「特に決まっていないこと、指導要領への明記もないため先生方の裁量になること、扱いやすいテーマに沿って合った項目を活用していくことがよい」と話していた。実践では理科や社会科、朝の会での活用が多かったとのことである。「社会科で食料生産の単元を扱う際には、それに対応した項目（飢餓をなくそう）を扱うなどの活用方法があるとのことである。SDGsの取り入れ方は、教師の授業の工夫にかかっている」と話していた。

### 感想

これからさらに広がりを見せるであろうICT活用とSDGsについて、現段階ではどのような取り組みが行われているのかを学ぶことができた。新しいものにも果敢に挑戦し、子どもの学びに繋げられる先生になりたいと感じた。（3年 高橋 ことみ・高橋 佑芽）

With コロナにおけるICT活用の推進 ～今だからこそ iPad の活用と子どもの深い学び  
遠藤 学（福島県・福島市立福島第三小学校・平成21年度卒）

### 1. 実践の背景

文部科学省は、令和2年から「GIGAスクール構想」の取り組みを始めた。今日、多くの学校で端末が普及しているが、現場での課題は数多くある。各学校への端末やネットワークの整備が完了し、今後は現場での取り組みがますます重視されるようになり、私たち教員への負担が増している。そんな中、福島市教育委員会では、令和3年2月に全市立学校に iPad を配備し、同年4月より「福島型オンライン授業」を始めた。日常の授業において、オンラインで調べたり共有したりして、iPad を活用していくこととなった。また、iPad を各家庭に持ち帰り、家庭学習等に役立てている。

そこで、このコロナ禍だからこそ ICT 端末に進んで触れ、操作することで、どの教科においても、子どもの学びを深めるために効果的な活用について考えていきたい。

### 2. 実践の方法・内容

- ・学習課題に合わせた Metmoji Classroom（授業支援アプリ）の活用（各教科）
- ・アンケート集計での Numbers の活用（算数科・総合的な学習の時間）
- ・資料を効果的に位置付けた Keynote を活用した発表（国語科・総合的な学習の時間）
- ・動画を活用した振り返りの充実（体育科）
- ・ペーパーレス化を図り、デジタルデータによる学習課題の配布（家庭学習）

### 3. 考察

- (1) 学習課題に合わせた iPad の活用 教師が意図して準備したページを配布することで、学習のねらいに合わせた効果的な活用ができる。教師が児童全員の画面をモニタリングして机間指導ができるため、個に応じた支援ができたり、意図的指名に生かせたりする。また、モードを切り替えることで、児童が一瞬にして他の児童のページを見ることもでき、考えの共有を図ったり、話し合いを深めたりするための手立てとして有効である。
- (2) デジタルデータによる学校と家庭の学びのつながり iPad を使いデジタルデータで学習課題を配布することで、今まで行っていたプリント を配布する必要がなくなるため、環境に優しい学習環境を整備することができる。そのため、iPad を持っていれば、どんなときでもそのときに合わせた学習ができる。また、いつでもどこでもオンラインにアクセスできる環境を活用することで、学校の授業と家庭学習とがつながりシームレスな学びとなる。これが子どもの深い学びへとつながっていく。

大学院における研究と学び～教育実践における SDGs の現状と課題に関する一考察～  
村上綾花(東北福祉大学大学院教育学研究科 2年・2020年度卒)

### 1. 実践の背景

SDGs は、現在直面する地球規模の問題解決のために全世界で取り組まれている。教育においては、ESD(Education for Sustainable Development)と呼ばれ、平成 29 年告示学習指導要領には「持続可能な社会の担い手の育成」と明記されている。また、2020 年から 2030 年までを目標とした「持続可能な開発のための教育:SDGs 実現に向けて(ESD for 2030)」を掲げ、さらなる推進と取組が求められている。しかし、学校教育における SDGs 実践に関する実践事例や実践方法の研究が少ないことが課題となっている。

そこで、本研究は、SDGs 実践者へのインタビュー等の調査を通して、教育実践における SDGs の現状と課題の検討及び考察を行った。さらに、そのことを踏まえ、SDGs の教材を開発した。その一部の調査結果と考察を紹介する。

### 2. 実践の方法・内容

#### (1)宮城県小学校教諭へのインタビューから得られた SDGs の現状と課題

教育における SDGs の取組の現状を知るために、宮城県内小学校教諭 1 名に対してインタビューを行った。そこで明らかになったことを 3 点にまとめた。

- 1 SDGs の扱い方の模索している(教科や単元との関連が見えないなど)
- 2 テーマの偏りがある(扱いにくいテーマもあるなど)
- 3 担任・教員の負担とばらつき(教材や資料の活用・指導は担任裁量など)

#### (2)SDGs 教材開発

文献調査やインタビューを通して、学校現場において活用しやすく、親しみを持って SDGs の理解と関心を深めることができる SDGs ツールの作成が必要であると考えた。筆者作成の「SDGs カード」を小学校教諭に各学級で一定期間実践してもらいアンケート及びインタビューを行った。

作成した教材は、児童にとって SDGs に対する興味関心を引き出すことができるものとなり、教師にとっても取り組みやすいものになったと示唆される。

### 3. 考察

大学院で学ぶことの魅力

学びをアウトプットすることで、さらに学びを広げることができること

- 1 大学院に進学したからこそできた研究であり、深められた学び
- 2 新しく習得できた知識や技術(特に、質的研究の方法、動画の作成等)
- 3 「三浦ゼミオンライン教師塾」=違う学年との交流による学び

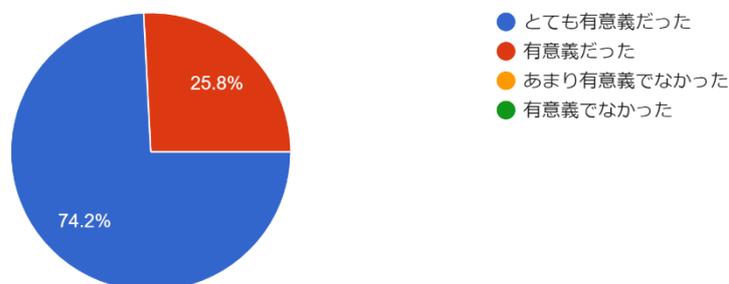
今後の展望:来年度から教育現場で実践と研究を継続。

## 第2分科会 アンケート結果

### 1 講話について (93件の回答)

講話について、当てはまるものをお選びください。

93件の回答



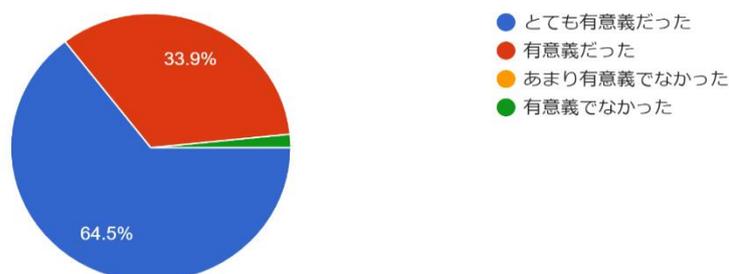
#### 〈ご意見〉

- ・ GIGA スクール推進校として、どんなことを行っているのかその現状と結果、今後の展望について、子どもたちの様子を交えながら講話して頂いたので分かりやすかったです。
- ・ IA や機械化、自動化で仕事に就けにくくなりそれらに負けないように非認知能力を確実に養成したいと考えていて、心のどこかで AI などが悪い者のようなイメージを持っていた。でも講話を聞いて AI や機械などと共存していくことが大切だと気づかされた。
- ・ GIGA スクール構想の推進にあたり、実際の指導と学校の様子を見ると ICT を導入して良かったという意見が多かったですが、講話の中では紙の方が良いという意見が大多数を占めていました。そこから、ICT の活用の前にこれまでの常識を疑う必要があると感じ、教育活動一つ一つを振り返るきっかけがこの GIGA スクール構想なのかなと思いました。

### 2 卒業生の話題提供・実践発表は有意義だったか (62件の回答)

卒業生の話題提供・実践発表の内容について、当てはまるものをお選びください。

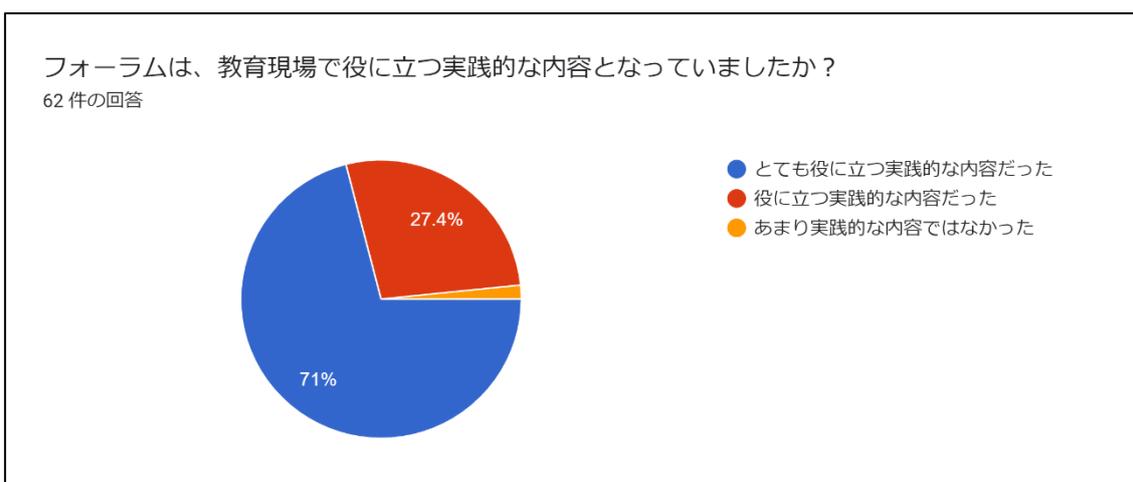
62件の回答



### 〈ご意見〉

- ・ 遠藤先生のお話を聞いて、現場の実践や子どもたちの反応を知ることができて大変勉強になりました。私自身、ICT 機器の操作に苦手意識があり、ICT を遣った授業づくりに正直不安がありました。先生のお話の中で、ICT をうまく授業の中で使うことで、子どもはこちらの想像以上の反応をしてくれるという話を聞いて、私も子どものために頑張りたいと思いました。
- ・ 村上さんのお話を聞いて、1つの教材の可能性の広さを感じました。SDGs カードを記入しながらインプット、完成したカードを見たり読んだりしてアウトプット、さらにそれを掲示することで子どもが学びを行動に移すことができるなど、1つのテーマでも学びに連続性ができる子どもが学んだ実感を得やすいのではないかと感じました。
- ・ ICT や SDGs に関するお話を聞いて、子どもたちは大人が想像している以上に様々なことに興味を持っているのだと感じました。そうした興味関心を引き出すためにも、教師のしかけや工夫が不可欠であると思うので、今回学んだことを現場に出てから実践してみたいと思います。

### 3 教育現場で役立つ実践的な内容だったか (62 件の回答)



### 〈ご意見〉

- ・ どんなに時代が変わり ICT 化が進んでも、やはり教育現場は「人」ということを改めて考えることができた時間でした。タブレットを操作するのも、授業のなかで効果的に活用する方法を仕組んでいくのも「人」。子どもも教師も「人間力」が問われている。それを肝に銘じて現場に立っていきたいと考えます。
- ・ 今回のフォーラム全体を通して、ICT はあくまでも方法であり、目的ではないことを忘れずに、目の前の子どもたちの可能性を最大限広げられるような授業作りができるようになりたいと思いました。
- ・ 実際に現場での実践の様子や大学院でのお話を聞ける機会でしたので、もう少し長い時間聴けるとよりよかったですと思いました。

## 第3分科会（初等教育：小学校B）

### <第3分科会記録>

司会：武山依里香、安川ちあき

参加者 卒業生：2名、一般：1名、在学学生66名、本学教員3名、計72名



1. 荒井渉先生（2020年度卒）は、2年目で確かな学びを目指して、小学校4年生の外国語活動「言語活動を中心とした授業づくり」について取り上げた。外国語活動では、言語活動を中心とした授業を展開し、児童が「できた」と感じられるようにすることが大切であること、歌やコミュニケーションを取るような協働的な学びが効果的であることを紹介した。

#### 質疑の様子

参加者から「英語科の小中連携の活動はどのように行われているのか。」と質問があった。先生は、「勤務校の小中連携は今年度から始まったため、まだ試行錯誤しているところはあるが、中学校の先生と会議を定期的に行ったり、お互いの児童生徒の様子や授業の内容を知るために、小中連携シートを用いて情報交換を行ったりしている。」と回答した。また、「中学校側から、小学校で行ってほしい活動の要望を受けるなど、小中学校間のコミュニケーションを取るようにしている。」と答えた。



2. 渥美智博先生（2013年度卒）は、教員になってまもなく10年が経過しようとしており、「教師として1番大切にしたいこと」というテーマで、学級経営や教科指導を中心にお話をいただいた。渥美先生は「目の前の子どもたちとしっかりと向き合うことを重視した学級経営」の大切さについて、学級での具体的な取り組みを例に教えてくださった。

#### 質疑の様子

まず、1つ目に「事務作業をするうえで工夫していることは何か。」という質問が出た。渥美先生は「休み時間は児童と共に遊ぶため事務作業をしない。朝や放課後に事務作業をするようにし、仕事を逆算して計画を立てることが大切である。」と話した。2つ目に「授業をするうえで意識していることは何か。」という質問が出た。渥美先生は「学びのゴールを決め、キーワードを設定したり、学びのゴールから逆算して授業計画を立てたりすることを大切にしている。」と話した。

#### 感想

子どもたちが自ら課題を見つけ、解決することができるような授業や活動を展開していくことが、子どもたちの確かな学びにつながるということが分かった。目の前の子どもたちのためにできることを考え続けることが大切だと感じた。 （3年 市川 知佳・星 愛華）

第4学年 外国語学校「言語活動を中心とした授業づくり」  
荒井 渉（神奈川県・大和市立柳橋小学校・令和2年度卒）

### 1. 実践の背景

令和2年度より5、6年生での外国語科、3、4年生での外国語活動が全面実施となった。しかし、教育現場で人手が不足しており、専科教員が十分に配置できない現状がある。その中で担任教員が外国語・外国語活動の授業を作っていく必要がある。勤務校では、外国語・外国語活動の授業の進め方が「わからない」と感じている先生が多い。「自分の外国語の授業や指導技術に自信がなく、児童の意欲も喚起されない」との相談を受け、どのような外国語・外国語活動の授業が児童にとって楽しめるものなのか考える必要があると感じた。さらに、そのような単元・授業を展開していくには、どんなことを意識して授業づくりを行えばよいか考えたい。

### 2. 実践の方法・内容

- ① 児童が楽しみ、進んで取り組む授業とはどんなものか。(ふりかえりシートより)
- ② 言語活動の設定（文献より）
- ③ 言語活動に向けた授業づくり（6月に行った Let's Try2 Unit3 「I like Mondays。」の授業より）  
・授業の時間配分 ・効果的なインプットの工夫 ・効果的なアウトプットの工夫
- ④ 担任として外国語および外国語活動の授業を行う意義（振り返りシートや児童の様子より）

### 3. 考察

(1)「言語活動を中心とした授業づくり」に大切なこと 主となる言語活動に十分な時間を設けることが大切である。そのために、言語活動で使用させたい言語表現を効果的にインプットし、アウトプットさせる活動を設定する。まず、単元全体がインプットからアウトプットに比重が移るように計画する。次に、授業内で十分なインプットの機会を設けながら、言語活動で使う表現が使用できる活動を厳選することで、言語活動に向かうまでの過程を吟味していくことが大切である。活動が決まったら、言語表現を使ってどのように児童と対話するか、どのように言語表現を引き出していかを考え、言語活動へ活かしていくことが必要である。

(2)担任として行う外国語および外国語活動の授業について 担任が外国語・外国語活動の授業を行うことで、児童理解や学級経営に生かすこともできる。全ての児童が英語を話す活動があることで、普段コミュニケーションをとるのが難しい児童が話せたり、協力して授業を受ける楽しさを感じたりすることも多い。言語の定着には時間がかかり、高学年では評価に迫られて焦って指導してしまうことが考えられる。そのような時こそ、児童理解の視点から、一人ひとりに目を向けて、児童が楽しく進んで取り組む授業へと改善していくことが大切である。

教師として1番大切にしたいこと  
～ 学級経営とICTの有効的な活用を通して～  
渥美 智博（宮城県・宮城教育大学附属小学校・2012年度卒）

### 1. 実践の背景

児童が主体的に学ぶことを通して「確かな学力をつける」ために授業をどのように構成していけばよいか日々考える中で、よりよい教育活動を行うためには、その原点に「子ども一人一人が安心できる学級づくり」があると考えている。一部の児童ばかりが活躍する学級ではなく、チームとなって取り組める雰囲気がある学級を教師が示し、意識して取り組むことでお互いが学び、認め合い、ひいては児童が安心して力を発揮できる環境づくりにつながると考える。コロナ禍により活動が制限されることもあり、児童の心理的負担が増え、人間関係の問題も起きやすく、学級経営の重要性、その中での確かな学力を育むことの大切さを今まで以上に感じている。いつの状況であっても、児童のことを考え、指導していく重要性を感じ、発表主題を設定した。

### 2. 実践の方法・内容

#### 【学級経営】

#### ○児童が安心できる学級経営

- ・よい行いを積極的にほめることで、自己肯定感や自ら行動する力を高める雰囲気づくり
- ・児童一人一人のよさを認め、励ます声掛けを通して、児童同士がお互いを認め合う関係づくり
- ・悩んでいたり、自分から話しくかたたりする児童も話せる関係づくり
- ・消極的な雰囲気を出さないスモールステップの評価と挑戦した気持ちを認める雰囲気づくり
- ・「わかった」、「なぜ」から学級の学びを深めるという意識づくり

#### 【ICTの効果的な活用】

#### ○児童に気付かせる学習計画

- ・より上達できるようにICTで自分の動作を客観的に見る活動。
- ・最初と最後の授業の様子を動画に撮り、どのように変わったか気付かせる時間の設定。
- ・模造紙との併用を通してより効果的な学習活動の設定と主体的な学びを生み出す仕掛け。

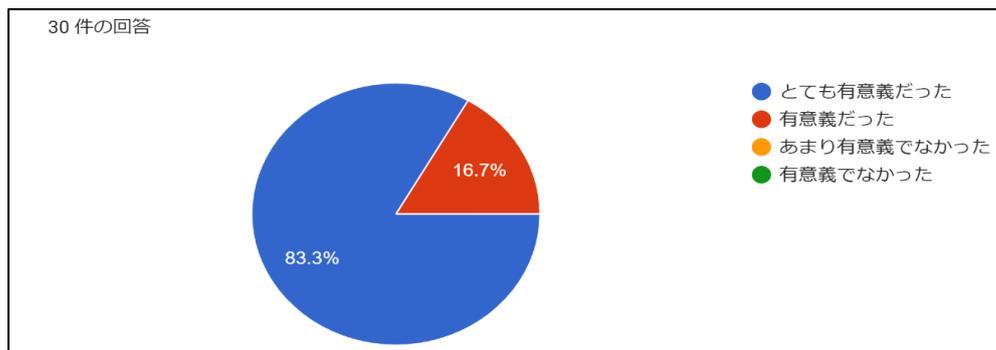
### 3. 考察

- (1) 児童と児童の良い人間関係づくりが、自分で考え、進んで働く集団の育成につながる  
・教師の信頼関係づくりとしての働きかけは、学級経営と同じ重要な土台の一つであった。会話や授業、遊びを通して、児童と児童がよりつながっていくことを感じた。特に下学年になるほどその教師の役割は重要で、自分の気持ちが言えたことで、未然に生徒指導でき、児童自身が友達の考えに気付いたり、自己表現することの大切さに気付いたりするきっかけになった。特にコロナ禍では人間関係が希薄になったり、活動などの制限が児童の我慢につながったりして、精神的に負荷がかかっている傾向にあり、教師のこのような役割はより一層求められると考える。この自己表現できる環境をつくることで、児童が自ら考え行動する集団作りにつながっていく。
- (2) ICTの活用は従来の授業をより効果的に質を向上させるために有効な手段  
・ICTで自分の動作を客観的に見ることで、どこを修正するのか、どこが良くなっているのかなど、自分の動作に注目することができる。また、スロー再生や停止などを効果的に使うことでどのような動きをすると記録が向上するのか話し合えるきっかけになった。初回と最終回を比べることは動画ならではの良さで、自分の成長を児童自身が実感できるとともに、学びの足跡を残すことにもつながった。ICTの活用には、操作などの技能面の不足など課題は残るが、反復練習していくことでそれは改善される。児童からより効果的な学習ができるための方法としてICTという発言が出てくるようになればいいと思うとともに、本当にそれが有効なのか、学習の目的によって何が最適な方法なのか判断できるような児童を育て、指導していくことも求められるように感じる。

以上のことから、児童が学習だけでなく生活においても主体的に学べる教育の根幹には「教師の確かな学級経営」があり、その基盤を生かし「ICTを最大限に有効活用する」ことで学習の質が向上し「確かな学力」を育むことにつながると考えられる。

### 第3分科会 アンケート結果

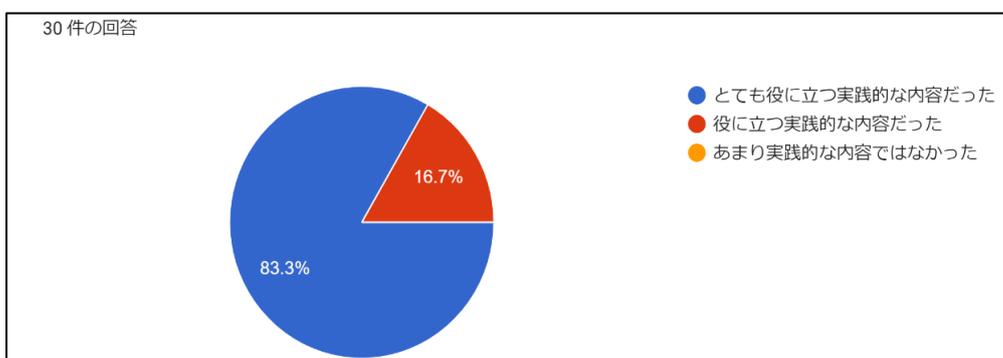
#### 1 卒業生の話題提供・実践発表は有意義だったか



##### 〈ご意見〉

- ・ 外国語活動と体育それぞれの実践から、確かな学びに向けた課題設定、課題解決、生活に活かす場面を設けることの大切さを改めて感じました。子供たち一人ひとりの学びや成長を手助けできる教員になれるよう、これからも学んでいきたいです。
- ・ 学校で実際にどのように指導しているのかを、例を挙げながら分かりやすく説明していただきっていたため、とてもイメージしやすかったです。外国語活動 体育の授業では、授業の工夫次第で子供のやる気等にも影響してくるため、子供のことを考えた授業を行っていくことが本当に大切なのだと思いました。

#### 2 教育現場で役立つ実践的な内容だったか



##### 〈ご意見〉

- ・ 学級経営に対して現場の先生からお話を聞くことができ、子供と話す時間が何よりもよい学級経営につながるのだと分かりました。また、英語の実践では、目的意識や相手意識を持って言語活動を取り入れることが重要だと学びました。実践の様子や現場の先生の話聞く機会は限られているので、とても良い機会になりました。
- ・ 普段は聞けない現場での話を聞くことができ、学ぶことが多かったです。実践を聞くことにより、普段大学で学んでいることが将来教員になった時にどのように生かせるのか想像することができました。

## 第4分科会（中等教育：中高社会）

### <第4分科会記録>

司会：星 郁花、飯岡 孝太

参加者 卒業生：5名、一般：7名、在学生 61名、本学教員 6名、計 79名



1. 藤野敦先生は文部科学省初等中等教育局の視学官を務めておられ、「歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする学習活動」についてご講演くださった。学習指導要領改訂までの経緯を踏まえ、適切な課題（問い）を作る必要性や、単元を意識し構造的に授業をデザインすることが重要視されていることについてお話された。

#### 質疑の様子

考えさせる課題では学力差が出るが、まとめられない生徒にどう指導したらよいかという問いに対して、教員自身の問いが適切だったかをふり返り、また年間を通して生徒にどのような力を身に付けさせたいのかを再確認し教材研究するというアドバイスがあった。また、小学校から高校までのつながりが重視される今日の学校現場において、中学社会の教員はどのくらい「歴史総合」を意識するべきかという質問に関しては、中学生が高校生になった時、自ら問いを作れるように指導することが大事だという返答があった。



2. 齋藤優史先生（令和元年度卒）は、現在、栃木県の真岡市立真岡東中学校に勤務しておられる。生徒の学力向上に向けた授業実践として、学習課題の設定を工夫することで生徒の興味をひき、かつ毎時間の振り返りを徹底することで授業のつながりを明確にする試みについて、具体的な活動をもとに報告をされた。

#### 質疑の様子

振り返りシートの評価をどのようにしているかとの問いには、教師自らが具体的な回答を持つことが大事で、それに対して生徒がどのくらい近づけているかを見ているとの回答であった。また、グループ活動に参加できない生徒への対応については、まず一人一人の生徒が自分の考えを持てるよう、机間巡視において考えがまとまらない生徒にはヒントを出すこと、そして、グループ活動では司会者を設け、必ず全員が話し合いに参加するよう生徒たちに意識させていると返答された。

#### 感想

藤野先生のお話から、ねらいを明確にし、見方・考え方を働かせられるような問いを立てることが重要であることを学び、また齋藤先生からは具体的な実践授業や「トライ&エラー」の心構えを学ぶことができた。（3年 遠藤 孝太・長田 雄太・五月女 颯汰・武田 稜生）

#### 第4分科会 講演会抄録

「歴史的な見方・考え方」を働かせ、課題を追究したり解決したりする学習活動

—今次学習指導要領は歴史学習に何を求めているのか—

藤野 敦（文部科学省初等中等教育局・視学官）

今回の学習指導要領改訂では「義務教育を終える段階で身につけておくべき力は何か」、「18歳の段階で身につけておくべき力は何か」という観点から、初等中等教育の出口で身につけておくべき力を明確にしつつ、縦のつながりの見通しをもって系統的に組織していくことが重要とされている（平成27年8月26日 教育課程企画特別部会「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」）。特に本年（2022）は、4月より成年年齢が満18歳となり、2016年の選挙権年齢の引き下げと共に、学校教育の役割、特に高等学校卒業の意味について、あらためて考えるべき地点にたっていることは忘れてはならない。

社会科、地理歴史科、公民科では、教科、科目、分野の目標や内容の全ての項目に「（…見方・考え方を働かせて）課題を追究したり解決したりする活動を通して」資質・能力の育成を図ることが示されている。これは、単元など内容や時間のまとまりを見通して学習課題を設定し、諸資料や調査活動などを通して調べたり、思考・判断・表現したりしながら、社会的事象の特色や意味などを理解したり社会への関心を高めたりする学習などを指している。例えば単元設計において、課題把握（動機付け、方向付け）、課題追究（情報収集、考察・構想）、課題解決・新たな課題（まとめ、振り返り）などの学習過程が想定されるが、本報告では、歴史的分野、歴史領域科目に求められている学習の過程と構造について確認し、授業の改善点及びその留意点について考察する。概略は、次のとおりである。

1. 今次学習指導要領の基本構造
2. 「課題を追究したり解決したりする活動を通して」資質・能力を育成する学習
  - ① 歴史的分野、歴史領域科目における単元の設計と構成
  - ② 社会的事象の歴史的な見方・考え方と課題（問い）の設定との関係
  - ③ 見通しと振り返り—資質・能力の育成を踏まえた「指導と評価の一体化」—

上記の内容を通して、報告では以下の点について言及した。

- ・ 単元の構造化を図り、単元構造を踏まえた指導計画及び評価計画を明確にすること。
- ・ 各単元の学習目標を踏まえ、生徒が「歴史的な見方・考え方」を働かせることができる（視点に着目し考察や構想を行うことを促す）課題（問い）の工夫や、課題（問い）の考察に効果的・適切な資料の選択、提示が大切であること。
- ・ 生徒が学習の過程を振り返り、その過程を自分自身で分析したり、磨いたりする力を育成する場面を設定する。これが「主体的に学習に取り組む態度」の評価と密接な関係にあることを意識することが大切であること。

学習指導、学習評価の改善のために、その重要な役割を担うのが「単元や題材など内容や時間のまとまり」を見通した授業設計である。学習の目標を実現するために、中期、短期における単元計画、そして単元計画に基づいた評価計画を、教師一人一人がどのように設計していくか、その設計に関わる力が重要となる。

学力向上に向けた授業実践

～確かな学力保障を目指した課題と振り返りの徹底～

齋藤 優史（栃木県・真岡市立真岡東中学校・令和元年度卒）

1. 実践背景

本実践は、勤務校の学校課題『「主体的に学び、生涯にわたって学び続ける生徒の育成」～すべての生徒の学力保障と学力向上を目指す指導を通して～』を踏まえ、歴史的分野（単元名「第二次世界大戦の惨禍」5時間扱い）において展開した。

多くの生徒が「暗記科目」と捉えがちな歴史的分野では、各単元がひとつの物語のようにつながっていることをより意識させることが大切である。そこで、前時と本時がつながるような学習課題の設定を意識するとともに、生徒が振り返り学習を通じて事象ごとの関係性を掴めるよう心がけ、課題解決型学習で能動的に学習に取り組ませる実践を行った。

2. 実践の方法・内容

(1) 生徒たちが自ら考え、内容理解を深めるための活動の工夫

一斉講義型の授業では生徒たちの多様な考えを引き出し、深めさせることは難しいので、課題解決学習を行い、一人では難しい課題でも、友人と協力して解決に向かう過程で内容理解を深めあったり、友人との対話を通して思考の幅を広めたりできる活動を取り入れた。

(2) 振り返りシート記入の徹底

単元のまとめを考えるとときの思考ツールになるよう、課題に対しての自分の考えを毎時間まとめさせることで、何を学んだのか自分の言葉で整理させる。

(3) 授業の流れがつながるような学習課題の設定

授業ごとに内容が分断されないよう、前時の内容を活用しないと課題解決にならない課題を設定した。

3. 考察

本実践を行ってみて、課題と振り返りの重要であることを改めて実感した。やはり、課題によって生徒たちの学習への向き合い方が変わり、何を学ぶべきなのかを生徒一人一人が理解して学習に主体的に取り組むことができた。また、振り返りを通して、その授業で自分が学んだことを自分の言葉で整理し、内容を確認する時間を設けることは生徒たちの学習内容の定着につながった。課題と振り返りは切り離すことなくセットで取り組まなければ、それぞれの効果は発揮されないことを実感した。

その一方で、課題と振り返りが行えたとしても、生徒たちが受け身になってしまう活動内容では、理解を深めることにつながらないことが分かった。課題解決授業で主体的に取り組ませる学習活動も必要なのだと改めて実感できた。

新庄まつりを用いた「歴史の扉」  
～伝統行事を使用した「歴史総合」の導入～  
叶内 史也（山形県・新庄東高等学校・令和元年度卒）

### 1. 実践の背景

本実践は今年度(令和4年度)1学年Tコースの「歴史総合」で行ったものである。今年度より始まった「歴史総合」において、生徒たちの歴史への興味をどのように引き出せるかを考えた際に、地元新庄市に260年以上続く「新庄まつり」を使えないかと思い計画した。私自身、「新庄まつり」の影響で歴史に興味を持ったということもあり、生徒たちにとっても身近な出来事・行事を用いることで興味・関心にも繋がると考えた。また、「新庄まつり」を製作する作り手が著しく減少していることもあり、伝統行事の担い手を育てるといった立ち位置も本実践は兼ねているように感じる。

「歴史の授業」というスタイルだと生徒たちは身構えてしまい、苦手意識がこびりついたらままたまになってしまうが、「まつりの授業」というスタンスを取ることによってフラットな状態で授業を進めることができたのではないかと感じている。

### 2. 実践の方法・内容

#### ①歴史と私たちー「新庄まつり」からみるいまと昔

「海外とのつながり」「起源」「古典的か近代的か」「国際交流」「女性参加」「役割」

#### ②歴史の特質と資料ー「新庄まつり」は何を語るのか

本来のテーマでは①ダンスからみるいまと昔、②「装い」は何を語るのか。というように設定されていたが、どちらも「新庄まつり」に置き換えて授業を実践した。①と②に共通して大切にしたのは「正解がない」ということである。正解を探すのではなく、自分が見つけたこと・感じたことを率直に言えることが大事だと生徒たちに伝えながら授業を進めた。

### 3. 考察

#### ○身近な伝統行事から学ぶ歴史的な見方・考え方

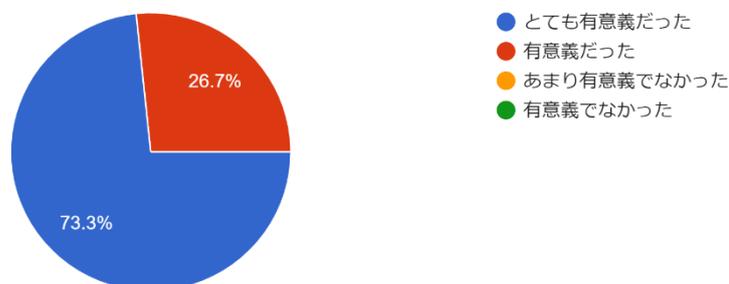
学生時代の恩師の1人、鍛代敏雄教授が常々口にしてきた「現在から過去へ、そして未来を展望することが歴史学の醍醐味」というのが、本実践を通してよく分かった。教科書や参考書を見なくても、身の回りには歴史を感じさせるものが山ほどある。教科書には載っていない教材をどこまで拾って話せるかが重要だと感じた。今回の実践では「新庄まつり」を扱ったが、自分が住んでいる街の地名や街並み、風土などを生徒たちと一緒に考察することで郷土愛が深まると考える。すべての生徒が確かな学びをするためには、教科書の内容を教えるのではなく、そこには載っていない何かを生徒たちに提供することが大切なのではないかと感じる。そのために自分自身の歴史への学びを深め、生徒たちの小さな疑問や声を拾い、深い学びをしていけるように今後も研鑽を積んでいきたい。

## 第4分科会 アンケート結果

### 1 講話について (30件の回答)

講話について、当てはまるものをお選びください。

30件の回答



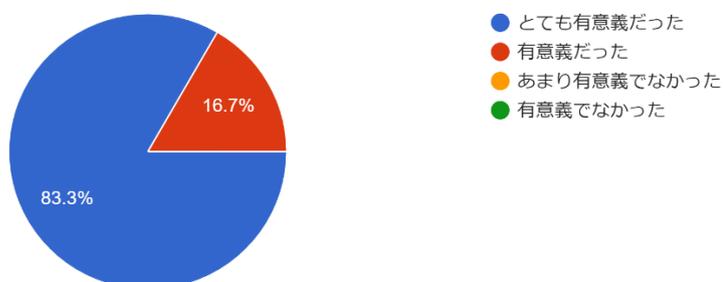
#### 〈ご意見〉

- ・ 単元のゴールを明確にした上で見方・考え方を逆算して考えるというお話しに納得する場面が多くありました。教員になった際には本日頂いた内容を実践していきたいと思えます。とても有意義な時間でした。ありがとうございました。
- ・ なぜ指導要領が変わったのかを解説していただくことで、深い理解をすることができた。
- ・ 学習指導要領の改訂によって今まで以上に義務教育を終えた時点での身につけておかなければならない力が見えてきた。「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を軸にして「単元」を意識した授業設計が必要になってくるように感じた。
- ・ 授業を行っていく中で、有効な「問い」を立てることの難しさにおちあたっていました。藤野先生の「何年かかけて、でいいのではないか」というお話しに救われた気がします。

### 2 卒業生の話題提供・実践発表は有意義だったか (30件の回答)

卒業生の話題提供・実践発表の内容について、当てはまるものをお選びください。

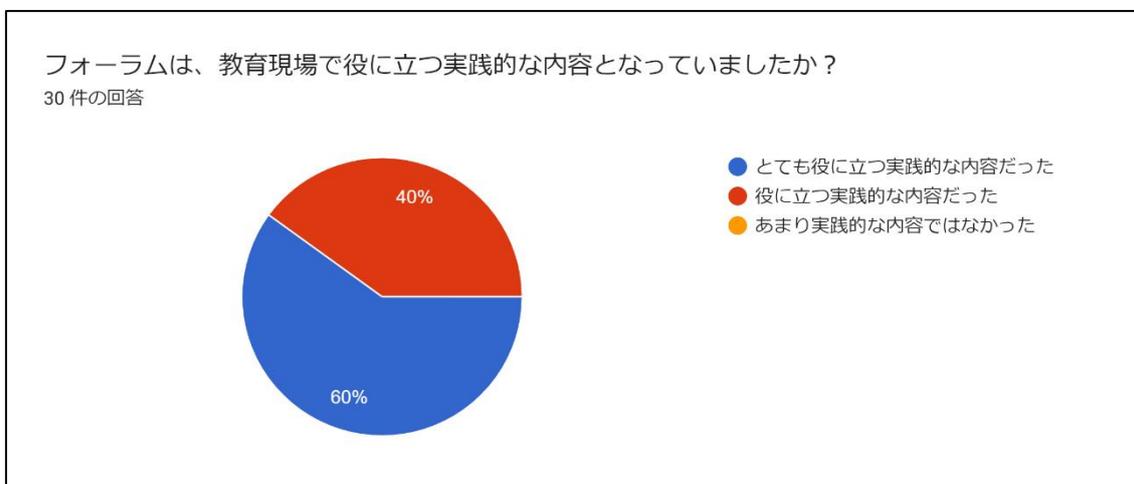
30件の回答



〈ご意見〉

- ・ 教育現場での実践が聞けるとても貴重な機会でした。学修課題と振り返りをセットで行うことで、1時間で何を学んだのかということフィードバックできることや、話すよりも生徒に話させることで生徒の表現力の向上が図れるなど、参考になるお話しばかりでした。ありがとうございました。・自分のスタイルを確立するのに2年かかったと話していたところに教師の難しさを感じたともに、挑みたいと思った。
- ・ 授業実践については、生徒の興味関心を引き出す課題設定と振り返りの手立てが非常に参考になった。必要な知識の定着とアクティブラーニングをいかに両立させるかという点で自分の授業づくりに課題を感じていたが、課題設定の工夫によって生徒主体でも知識を定着でき、情報の取捨選択や読解技術の向上も期待できることがわかった。
- ・ 私は定年間近の高校教員です。「物語としての歴史」は生徒にとっても理解しやすく、興味関心を喚起しやすい面もあります。しかし最近、「物語としての歴史」の限界や難しさを強く感じています。歴史を考える際の視点は、(きちんとした根拠と論理に基づくものである限り)本来自由なものなのだ、と思います。生徒はさまざまな発想をすでしょう。しかし、一方で教員側にはその人なりの歴史を考える視点があります。その整合をどのようにとればいいのか。これが私にとっても現在のテーマです。

3 教育現場で役立つ実践的な内容だったか (30件の回答)



〈ご意見〉

- ・ 現場にいると忘れてしまいそうな大切なことを振り返らせてくれる場になっていると思います。今後も継続して開催していただけるとありがたいです。
- ・ 3時間のなかで一貫性があり、大きな学びとなった。運営スタッフも不慣れな中、とても円滑に進めてくれてとても嬉しく思う。
- ・ オンライン参加でした。できれば現場の映像をカメラを通して観覧したかった。

## 第5分科会（中等教育：中高英語）

### <第5分科会記録>

司会：松本 芽生

参加者 一般：1名、在学生13名、本学教員3名、計17名

※中高英語コースは2024年度1期生が卒業予定。それに先立って分科会を新設した。



1. 東京学芸大学教職大学院教授の齋藤嘉則先生から「新しい学習指導要領に基づいた英語教育」と題してご講演いただいた。外国語（英語）科の学習指導要領に基づく、「言語活動」の指導法と、「コミュニケーション能力」の育成につながる授業の在り方について、「学習活動」と「言語活動」の具体的事例を確認しながらお話しされた。

#### <質疑の様子>

質疑応答では、新学習指導要領および実際の授業に対する指導法について、次々と活発な質問がなされ、齋藤先生より貴重なご意見を聞くことができた。

※齋藤先生の講演会の様子については、<第5分科会（中高英語）講演会>で詳しく報告を行った。次頁を参照。



2. 本学教育学部教授の久保田佳克先生は、「英語教育におけるICTの利用」と題してご発表いただいた。英語教育で用いられている視聴覚機器と英語教育におけるICTとの親和性や、教室におけるICTの活用方法を紹介された。また、今日の英語教員のなすべきことについて、ご自身の経験・体験をもとに、授業で活用できるICTの取り入れ方について発表された。

#### <質疑の様子>

質疑応答では、環境整備、体験されたトラブル、板書方法に関する質問があった。環境整備では、「家のネット環境が整っていない生徒にはどのような対応をしていたか」という質問に対し、「国から助成されたルーターをそのような生徒に配っていた」と返答された。また、板書方法については、「タイピングが遅い子がいることを加味すると、ノートに書かせることを重視する必要がある」と回答された。

#### <感想>

齋藤先生のご講演では、普段の大学の授業ではなかなか聞けないような貴重な話を聞くことができ、大変勉強になった。久保田先生のご発表では、ICTの取り入れ方や環境整備の実態が分かった。「常に勉強が必要なのが教員だ」と先生がおっしゃるように、日進月歩のICTについて自分でも積極的に活用し、将来教員となった時に役立てていきたいと思った。さらに、この分科会への参加を通じて英語科コースの1年生と2年生が一堂に会するいい機会にもなった。

(2年 平塚 蓮)

## <第5分科会（中高英語） 講演会記録>

司会：松本 芽生

新しい学習指導要領に基づいた英語教育  
齋藤 嘉則（東京学芸大学教職大学院 教授）

ご講演いただいた齋藤嘉則先生は、仙台市立中学校教諭・教頭・校長の職を務め、また、仙台市教育局学校教育センター指導主事、同教育指導課長、文部科学省初等中等教育局教科書調査官（外国語担当）を歴任された。現在は東京学芸大学教職大学院に勤務され、主に英語教育について研究を続けてこられた。ご講演では、新学習指導要領を確認しながら、指導理念および活動の在り方、言語活動とコミュニケーション能力の育成に関してご講話いただいた。

### <質疑の様子>

質疑応答では、新学習指導要領に関する質問が2つ、実際の授業の指導法に関する質問が4つ挙がった。主だった質疑応答は、以下の通りであった。

新学習指導要領に関連して、英語の授業は基本的には英語で行う All English への意見を求められた際、「生徒に多量の英語に触れられることが目的であったと考えられるが、子どもの実態によって日本語も英語も必要になる」と考えを述べられた。

授業の指導法に関して、英語の発音のカタカナ表記について是非を問われた際、「かなのふり方によるが、できれば、音声学の知見を踏まえて、口移しで音を真似させた方がいいと思う。カタカナで表現するのが難しいところもある」とご回答された。さらに、「導入・練習・使用」という手順で行われる伝統的な指導法 Presentation Practice Production (PPP) とタスク中心の指導法 Task-based Learning の割合について質問があったが、「今の教科書の大部分はほぼ4分の3がPPPで、残り4分の1がTask-based的活動で構成されているのではないかと思う。Task-based Learning の指導を実際に行うには、事前の指導に時間が必要なため現行の割合が当面ちょうどよいのではないか」とお答えになった。

次々と活発な質疑応答が行われ、齋藤先生より新学習指導要領の要点や実際の授業における実践の仕方をお聞きすることができた。

### <感想>

齋藤先生のご講演では、外国語（英語）科における新しい学習指導要領の変更点について学び、英語科の授業の中で行われる「学習活動」と「言語活動」の違いについて明確になった。また、指導と評価の一体化の点から、英語が得意な生徒（GG）、中間層（MG）、あまり得意ではない生徒（CG）と類別化し、当て方や発表順を工夫することによって、生徒の理解度を測りながら授業展開する手法を学び、実際に活用したいと考えた。さらに、Presentation Practice Production と Task-based Learning を比較したシンガポールでの実験で記憶定着率の高い指導法は Task-based Learning であったというお話があり、自分自身も教師を目指す上でその重要性を改めて感じた。 (2年 平塚 蓮)

新しい学習指導要領に基づいた英語教育  
齋藤嘉則（東京学芸大学教職大学院 教授）

「**学習指導要領**」は、「**学校が編成する教育課程の基準**」です。「**教育課程**」とは、学校の教育目標のもと計画された「**教育計画**」のことです。

外国語（英語）科の「**学習指導要領**」の指導理念に「**言語活動**」と「**コミュニケーション能力**」があります。「**言語活動**」の理解を進めるため、「**学習活動**」と「**言語行動**」について確認します。まず、「**学習活動**」は現行の学習指導要領（昭和33年（1958）告示）にもあるように、文の一部を置き換えて言わせるとか、範読にならって音読させるとか、文を転換して書かせることなど、ややおもすれば部分的練習のための活動である」と、昭和33年告示の「**学習指導要領**」の説明にあります。すなわち「**言語材料**」についての理解とともに、その運用を視野に入れた「**練習**」です。

次に、「**言語活動**」とは、言語を聞いたり、話したり、読んだり、書いたりするなど、言語を総合的に理解したり表現したりする活動をさすものである。したがって、英語の学習過程において、音声の練習をさせたりすることもあろうが、このような言語の一面についての練習は、「**言語活動**」に含めない。これに対して、「**言語活動**」は、音声や文型なども含めて、総合的に行わせるものであり、言語の実際の使用につながるものである」と、昭和44年告示の「**学習指導要領**」の説明にあります。

すなわち、「**言語活動**」は、（中略）、**言語の実際の使用につながるもの**で、「**言語の実際の使用**」を「**言語行動**」とも言い換えることができます。英語科の授業で行なわれる活動には、主に2つ、「**学習活動**」と「（言語の実際の使用につながる）**言語活動**」があります（伊藤（1983））。

それでは、次に、「**学習活動**」と「**言語活動**」の具体的な活動を確認します。

#### A: Transformational Drill

Teacher: I get up at six every morning. (Use *Kim*)

Students: Kim gets up at six every morning.

Teacher: I have breakfast at seven. (Use *She*)

Students: She has breakfast at seven.

#### B: Interviewing Activity

The teacher gets the students to ask three other people questions like the following, and write down their answers on the grid.

	Tom	Candy	Kate
What time do you get up every morning?			
What time do you leave home?			
What time do you arrive here?			

The students work in informal groups. Later they report back to the group, and/or class.

#### C: Shopping Activity (Task)

You go to a store to buy a gift for a friend. You have a price limit. Describe the friend to the clerk and ask what he/she recommends. Ask to have the gift sent/delivered to the friend.

和田（1997）は、Aの活動を「**学習活動**」、Bの活動を「**言語活動**」、そして、Cの活動を「**言語行動**」と説明しています。新しい「**学習指導要領**」は、「**言語活動**」を限りなくCのような活動に近づけることを求めています（**言語活動を高度化**）。

さらに、これらの例示のみでは日々の授業においてどのような「活動」を組み立て展開することが求められているか十分ではありません。そこで、Harmer（2001）がその視点を提供しています。次の The Communication Continuum の左側に振れた活動が「**学習活動**」であり、右にほぼ振り切れた活動が「**言語行動**」であると考えられます。

### The Communication Continuum (Harmer (2001))

#### NON-COMMUNICATIVE ACTIVITIES

- no communicative desire
- no communicative purpose
- form not content
- one language item only
- teacher intervention
- materials control



#### COMMUNICATIVE ACTIVITIES

- a desire to communicate
- a communicative purpose
- content not form
- variety of language
- no teacher intervention
- no materials control

最後に、前述のような活動を行なうことで「**コミュニケーション能力**」を育てることにつながると考えています。「**コミュニケーション能力**」は、(i) **文法能力** (grammatical competence) : 音声・単語・文法の能力 (ii) **談話能力** (discourse competence) : 1文以上をつなげる能力 (iii) **社会言語学的能力** (sociolinguistic competence) : 社会的に「適切」な言語を使う能力 (iv) **方略的能力** (strategic competence) : 問題が起こった時に処理する能力などの総体と考えられています。

この素養は、語学と文学を学ぶことで豊かになります。

#### <参考引用文献>

伊藤健三（1983）。「学習指導要領と言語活動」『研究紀要』。Vol. 9。東京教育研究所。

和田稔（1997）。『日本における英語教育の研究』。桐原書店。

Harmer, J. (2001). The practice of English language teaching, 3rd edition. England: Longman.

## 英語教育における ICT の利用

久保田 佳克（東北福祉大学教育学部 教授）

### 1. 英語教育と ICT

英語教育では昔から視聴覚機器が有効に利用されてきた。私が学校教育を受けた昭和の時代でも、他教科教員の多くは教科書とチョークだけで授業を行っていたが、英語教員は教室にカセットテーププレイヤーを持ってきていた。大学でも LL 教室を使用し、音声を中心とした授業を行っている教員もいた。英語教育と ICT は親和性が高いということはその歴史からも明らかである。

ICT という言葉自体は 21 世紀に入り、SNS が普及してから盛んに使われるようになった。英語教育関連の書籍を見ても、1990 年代半ばから「インターネット」という言葉が使われ始め、2000 年代に入って「IT」「ICT」という単語が見られるようになった。2020 年 3 月に、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による全国一斉休校でオンライン授業が急遽始まり、GIGA スクール構想が前倒しされ児童・生徒一人一台の端末の時代となった。デジタル教科書も 2024 年から英語で先行導入する方針が決まったようである。

### 2. 学習指導要領と教室における ICT の活用

現行の学習指導要領では「コンピュータ、情報通信ネットワーク」等の有効活用により、「児童・生徒の興味・関心をより高め、指導の効率化や言語活動の更なる充実を図る」ことがうたわれている。

以前は生徒の興味を高めるために、教員が授業中に外国旅行の写真を見せたり、海外での経験を話したりしていたが、現在は教室にしながら動画で外国の様子を見せることができる。電子黒板・大型モニターやプロジェクタとデジタル指導書の使用によって、フラッシュカードや音声・動画の提示も効率的になっている。海外との交流活動もインターネットを通してより容易になっている。現在、全国で ICT を利用した英語教育の多くの先進事例が報告されており、関連書籍の出版も続いている。

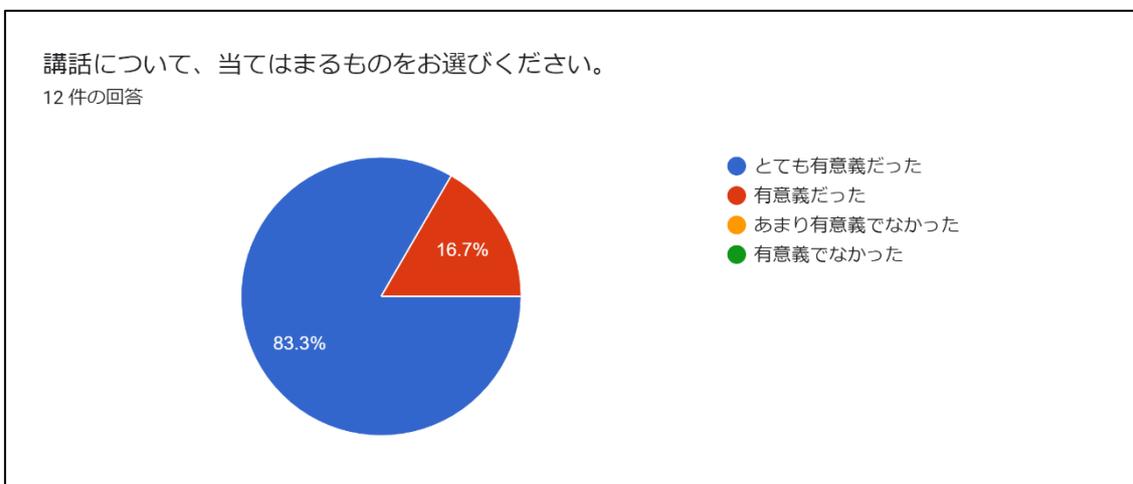
### 3. 教員になるまでに

英語教員のすべきことは加速的に増加している。学習指導要領では中学校・高等学校で「授業は英語で行うことが基本」とされ、教員自身の英語力を高めることが今まで以上に必要となっている。ALT とのチームティーチングに加えて、言語活動が重視されるようになり、「指導と評価の一体化」のためのパフォーマンス評価も求められている。教育現場は多忙化している一方、「働き方改革」も求められている。

教員は初任者研修があるとはいえ、一年目からほぼ一人前として扱われることになる。比較的自由になる時間が多い学生時代に、教育現場で必要とされる知識・技能を身につけておくことは重要である。英語力に加え、さまざまな校務と授業をこなすためにも ICT を扱う能力は必須となる。大学の授業を漠然と受けているだけでなく、授業を批判的に見ながら、自らの能力を高めていくことが英語教員を目指す学生諸君には求められる。

## 第5分科会 アンケート結果

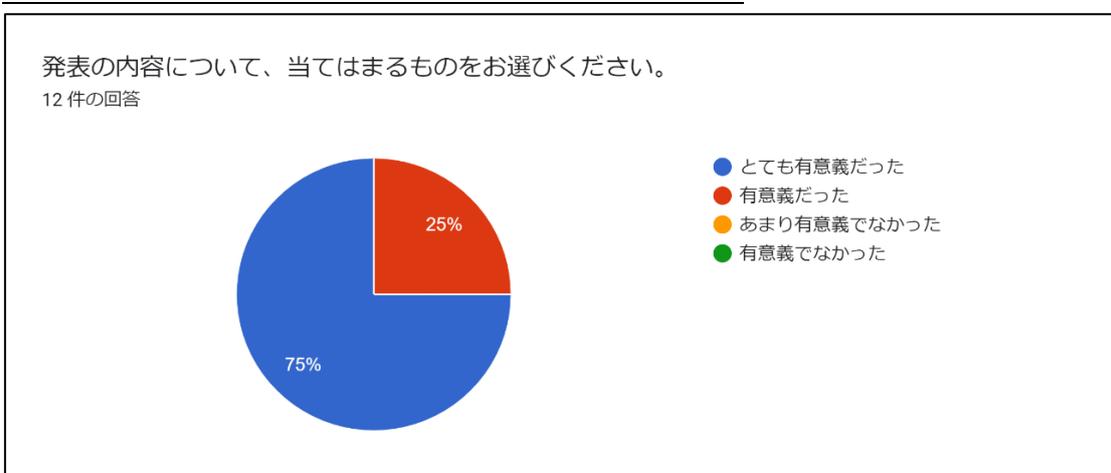
### 1 講演について (12件の回答)



#### 〈ご意見〉

- ・ 今回の講話を聞いて、学習指導要領、ICT への知見を広めることができました。このことを踏まえて自分がこれからどういう立ち回りをしていくべきかを考えてこれからの学校での学びを深めていこうと思った。
- ・ 齋藤教授のお話がとてもためになり、質疑応答については聞いてよかったと思えた。
- ・ 他大学の教授の講義はとても貴重な時間となりました。言語活動はどのようなものを行うのか改めて理解が深まりました。
- ・ 今回の教育フォーラムに参加させていただき、今まで以上に教員になることの責任の重さを感じ、自分にはまだまだ知識が足りていないと感じました。
- ・ 現場経験や行政での経験豊富な先生に具体例を交えてお話しいただき、大変有意義であった。

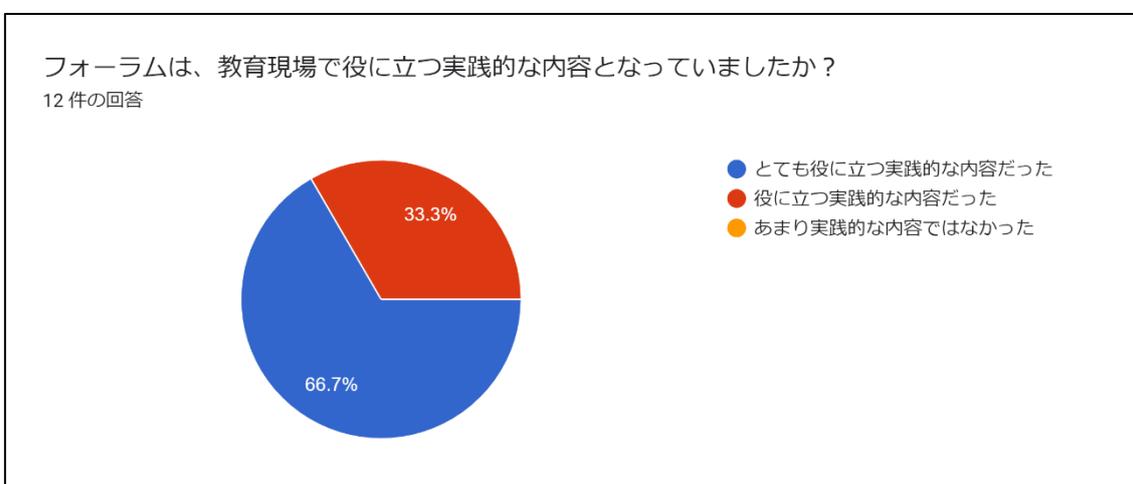
### 2 話題提供・実践発表は有意義だったか (12件の回答)



〈ご意見〉

- ・ とても貴重でためになった。
- ・ 自分の想像以上の意見が聞けたのでよかった。
- ・ ICT教育について、さまざまなことについて学ぶことができました。
- ・ 実際の経験談を聞くことができ、有意義な時間だった。
- ・ とても参考になった。
- ・ ICT教育については、実践の場で模索しながら取り入れている現状に共感した。
- ・ 私が知らなかったことを知ることができ、とてもよかったと感じました。

3 教育現場で役立つ実践的な内容だったか（12件の回答）



〈ご意見〉

- ・ 来年も対面で実施してほしいと思います。
- ・ 貴重な経験になりました。
- ・ 他の分科会にも参加したいと考えていましたが、開催の時間が重なっており聞くことができなかったのが、少し心残りでした。
- ・ 本当に貴重な機会をいただきました。ありがとうございました。今回の内容について、具体的な例をもう少し教えていただきたかったです。
- ・ 毎年このようなフォーラムがあるのは、学生の成長には特に良い影響を与えていると思う。
- ・ 教員を志す学生とともに、英語教育を考える貴重な機会となった。
- ・ 実際の現場に立つ際には有効的に知見を活用したいです。

## 第6分科会(特別支援教育)

### <第6分科会講演会記録>

司会：水江 こゆき、小山 かほる

これから特別支援教育に携わる皆さんへのメッセージ

～コロナ禍の特別支援学校での取組を含めて～

菊池 章博(宮城県立光明支援学校校長)



ご講演いただいた菊池章博先生は、初任の槻木小学校で特別支援教育(特殊教育)と出会い、現在は宮城県立光明支援学校の校長として勤務されている。特別支援教育との出会いや宮城県立光明支援学校の紹介、特別支援教育の仕組みと求められる教師像など、豊かな経験に裏打ちされた、幅広い視点からの学生に向けての講演であった。

#### 1. 特別支援教育(特殊教育)との出会い

菊池先生は初任から6年目に、校長先生からの要請で特別支援学級の担任となった。はじめて学ぶ特別支援教育に悩みを抱きつつも、特別支援学校(養護学校)での公開研究会や他校の先生の実践授業の紹介などに積極的に参加することで、特別支援教育の奥深さに触れることとなった。

#### 2. 宮城県立光明支援学校の紹介

光明支援学校は宮城県内の盲学校・聾学校を除く特別支援学校の中で最も古く、歴史のある知的障害特別支援学校である。教育課程としては小学部、中学部、高等部の3学部から編成されており、それぞれの学部は、特に自立活動と各教科等を合わせた指導を中心としたA課程(訪問教育を含む)と、各教科とそれらを合わせた指導を行うB課程に分けられている。

光明支援学校におけるコロナへの対応として「必要な感染対策を整理する」、「教職員間で共通理解を図る」、「保護者等へ協力をお願いする」、「児童生徒が理解しやすい対策を行い、その結果を蓄積する」といった工夫がなされていた。

#### 3. 特別支援教育の仕組みと求められる教員像

「そもそも特別支援教育の場とは何か」という問いに対し、教師が児童生徒と関わる主体である一方で、多くの専門家からの指導・助言を受けたり、また、さまざまな専門職からの支援を受けたりすることの必要性や、先輩の教職員や保護者との関りのから学ぶ場であることが説明された。求められる教師像として、特別支援教育の魅力である「児童一人一人に合わせた指導ができること」や「常に複数の教員や専門職と関りながら、子どもたちへの指導ができること」が大切であることを伝えていただいた。

#### 感想

菊池先生の講演では、特別支援教育を学び始めたときの思いや光明支援学校の様子などのお話から、特別支援学校の現状や特別支援学校教員の実際について学ぶことができた。また、これから特別支援教育に携わる学生が積極的に学べるよう、背中を押してくださるような講演であった。

(3年 大沼 寛季)

これから特別支援教育に携わる皆さんへのメッセージ

～コロナ禍の特別支援学校での取組を含めて～

菊池 章博(宮城県立光明支援学校校長)

これから特別支援教育に携わる方々に対して、先に特別支援教育の道を歩いてきた者として、感じていること、思っていることをメッセージとしてお伝えすることとした。

特別支援教育に携わるきっかけは人それぞれかと思う。私自身が携わることとなったきっかけは、非常に受動的な関わりであった。しかし、携わった以上は、「学ぶこと」が必須であった。何を学ぶのか、どう学ぶのか、といったことについては、自分から能動的に動かない限り進んでいかなことは確かである。試行錯誤しながら、特別支援学級の担任として「特別支援教育の奥深さ」の一端に触れることができたことについて、エピソードを交えてお話しさせていただいた。

また、今回のテーマである特別支援学校に求められる教師像といったことを踏まえて、現在勤務をしている県立の知的障害特別支援学校である光明支援学校について紹介させていただいた。教育目標、児童生徒の様子、教育課程、進路状況等について概要を説明しながら、最近の取組として、新型コロナウイルス感染症対策としてどのようなことを念頭に置きながら対応に当たってきたのかということについても説明した。新型コロナウイルス感染症対策のキーポイントとなる『三密を避ける』『常時換気』『マスク着用の励行』『手洗いの励行』が困難な状況下にあった(ある)知的障害特別支援学校での取組の一端をお話しさせていただいた。学校で教職員が共通認識の下に対応していくために作成した、『宮城県立光明支援学校バージョン 新型コロナウイルス感染症への対応に関するQ&A～新しい学校生活に向けて～』の中から具体的な事例を紹介させていただいた。

さらに、特別支援教育そのものの考え方を確認しながら、特別支援学校に求められる教師像ということを示した。基本的には特別支援教育に携わる教員も通常の学級での教育に携わる教員も求められるものは同じである。しかし、児童生徒一人一人の状態に合わせた教育を児童生徒とじっくり向き合いながら行えるところに魅力がある特別支援教育の中で、ポイントとなると考えていることについて説明させていただいた。それは、「不易と流行」である。どんなに社会が変化しても時代を超えて変わらない価値のあるものとしての『不易』の部分は、特別支援教育の中ではどのように捉えるか、光明支援学校の歴史を踏まえて説明させていただいた。また、時代の変化と共に変えていく必要があるものとしての『流行』の部分は、教師の専門性の部分と関連付けながらお話しさせていただいた。

最後に、これから特別支援教育に携わる方々に、不易の部分をも自分自身の柱として大切にしながら、自分が関わる児童生徒と一緒に、時代の変化(流行)に合わせて取り組むことが必要ではないかとまとめさせていただいた。

## <第6分科会記録>

司会：小山かほる、水江こゆき

参加者 卒業生：3名、一般：3名、在学生 60名、本学教員 8名、計 74名



1. 千葉裕先生（2015年度卒）千葉先生は、教員生活7年目で自身の講師と教諭の経験を踏まえながら、児童生徒との関わり方について紹介した。子どもたちの一人ひとりにはかないプロセスがあることを三角の図を用いて説明した上で、先生が子どもと同じ目線に立って行うアプローチのあり方を考える大切さについて取り上げた。

### 質疑の様子

「高等学校や小学校などとは違う、特別支援教育のプロとしてのあり方をどのように考えているのか」という質問が、本学教育学科准教授・和史朗先生からあった。それに対して、発表者・千葉裕先生は、高等部（高等支援学校）の担当者は誰もが、進路の実習や生徒の進路選択を指導できる知識を持ち、さまざまな場面で学び続けることの重要性を指摘した。また、児童生徒を大切に思い、保護者の疑問・質問に一つひとつ答え、提案することが大切であると述べた。



2. 宗像梨緒先生（2020年度卒）宗像先生は、教員生活2年目で、所属校の知的障害の子どもたちの様子を紹介したうえで、効果的であった実践例を報告した。宗像先生が自身で作製した「りゆうかるた」や「がんばることボード」などの教材を活用しながら、子どもたちの意欲関心を高めることを意識した授業を行っている様子を取り上げ、「主体的・対話的で深い学び」の重要性について説明した。

宗像莉緒先生は、自作した具体的な教材提示などの発表を行ってくださり、特別支援教育を目指す学生にとって、より一層理解が深まり意欲を高めるきっかけとなった。

### 感想

千葉先生と宗像先生、どちらも特別支援教育ならではの難しさに直面しつつも、「共感する気持ち・導く・励ます」のプロセス、「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた指導や教材作製など、それぞれ工夫を行いながら子どもたちに寄り添い、子どもたちと共に歩んでいる様子が印象的だった。

子どもたちへのアプローチの方法には正解がなく、個々の実態を考慮しながら関わることの大切さを学ぶことができた。

(3年 町田 龍司)

特別支援学校に7年勤めて感じたこと・学んだこと

~公立・私立での経験を通して~

千葉 裕（学校法人明和学園いずみ高等支援学校・平成27年度卒）

### 1. 主題設定の理由

全国的にも数少ない私立の特別支援学校と公立の特別支援学校での経験を踏まえて、これから特別支援学校を目指す学生の皆様や先生方への一つの話提供となればと考え今回の題目を設定した。

### 2. 発表内容(特別支援学校での経験を踏まえて)

#### (1)公立支援学校高等部<1年目>・小学部<2・3年目>

社会人1年目。分からないことだらけだったが、様々な障害や特性等の児童・生徒と接することを心掛け一人一人とコミュニケーションを取ることから始めた。2年目から小学部。高等部との実態差。自傷・他害、乱れてしまう児童に対しどのように接すれば良いか試行錯誤。必ず授業に出席させなければならない等の固定概念は覆し、児童のペースに寄り添い、語りかけ、気持ちを知ろうとした。結果、信頼関係が生まれたことにより児童は支援を受け入れやすくなり、課題克服に結びついた。

#### (2)学校法人明和学園 いずみ高等支援学校<4年目~現在>

私立では創立者の理念の継承やそれらを意識した指導が大切。また私学独自の特色ある教育課程が組まれているため、自分のアイディアを生かし自分の力を発揮する機会が多く得られると感じる。本校では合理的配慮だけでなく、年齢相応の対応や出口の教育として厳しさを伝えなければならないことなどを意識しながら支援している。自立に向けての生活をする上で目指すべき進路はどこか、そのためには何をどのように支援しなければならないかを日々学年、学部全体等で共通理解した上で関わり、指導に一貫性が持てるよう支援している。事前に生徒のつまずきや難しさ等を予測して各生徒に合った指導を探りながら指導に当たっている。

### 3. 考察

実際に特別支援教育に携わり、児童・生徒からたくさんのことを学び、たくさんのがいを感じてきた。特別支援教育は試行錯誤の連続である。その時期、その時期において必要な目標を定めるが、目標到達へのプロセスは人それぞれであり、まっすぐ進むこともあれば遠回りしたり、後戻りしたりすることもある。どのような状況下に置かれても、焦らず対応し、常に謙虚な気持ちで学ぼうとする気持ちは忘れてはいけない。特別支援学校に勤めるからには「特別支援のプロ」として日々学び、自己研鑽していかなければならないと私は考える。また、子どもたちの成長を心から喜ぶことができる教師はいつの時代も必要とされているのではないだろうか。

「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業づくり

宗像 梨緒（福島県・西郷支援学校・令和2年度卒）

### 1. 実践の背景

福島県特別支援学校教諭として採用されて2年目となる。1年目は3・4年生通常の学級、重複障がい学級に担当として入り、2年目の今は小学部4年生通常の学級児童3名の担任をしている。校内研究において「『主体的・対話的で深い学び』の視点参考表」が整理され、私自身も日々の授業において「主体的・対話的で深い学び」を目指して手立てや教材の工夫などについて試行錯誤しながら授業づくりを行なっている。

### 2. 実践の方法・内容

○国語、算数の授業における「がんばることボード」（今年度）授業の中で自分で頑張りたいことを選択し、学習態度を意識して取り組めるようになることを目指し、毎時間のめあての確認と合わせて学習時の姿勢や話を聞く態度などについて自分が頑張りたいことを選び、まとめの際に振り返るようにしている。

○生活単元学習で行った「ケイドロ」における「さくせんボード」（昨年度）捕まえ方、仲間の助け方、牢屋の守り方を工夫しながら「ケイドロ」を楽しむことを目指し、「さくせんボード」を使って実際に動き方を操作しながら警察チームは捕まえ方、牢屋の守り方を、泥棒チームは仲間の助け方を考えられるようにした。

○国語の授業で行った「りゆうかるた」（今年度）理由や状況を相手に分かりやすく伝えることができるようになることを目指し、取り札を「～なので」、取り札を「～してください。」「～してもいいですか。」「～する。」などとして、かるたを通して文章を言葉にする経験を積む学習を行った。

### 3. 考察

#### （1）主体的な学びを目指して～がんばることボード～

選んだ後に姿勢を直す姿や授業中に友達同士で指摘し合い、姿勢や聞く態度を直そうとする姿が見られた。自分で選択する経験、日頃の学習態度を振り返る機会、自分で決めたことを実行しようとする力にもなっている。自己選択させることでより意識が生まれ、主体的な授業態度につなげることができるのだと感じた。

#### （2）対話的な学びを目指して～さくせんボード～

自分や友達の顔写真を動かしながら作戦を考え、教師や友達に伝える姿が見られた。話し合いの場において、言葉だけで話し合いを進めるよりは、何かきっかけとなるものがあるとより話し合いを深めることができるのだと感じた。

#### （3）深い学びを目指して～りゆうかるた～

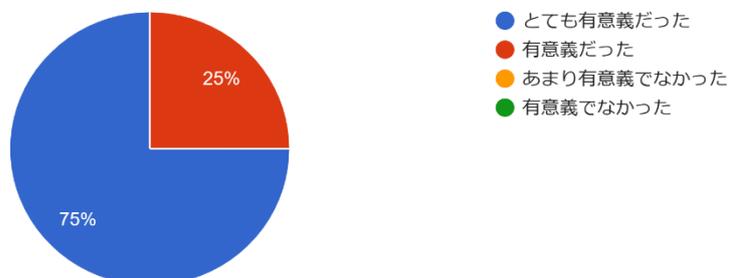
国語の授業後、教師が児童Aの机の前に立っていてAが椅子をしまうことができなかつた時、「椅子をしまいたいので、どけてください。」と伝えてきてくれた。日常生活と結びつけて授業づくりをすることで、学習したことを生活の中でも活かそうとする姿が生まれ、深い学びとなるのだと感じた。

## 第6分科会 アンケート結果

### 1 講話について (40件の回答)

講話について、当てはまるものをお選びください。

40件の回答



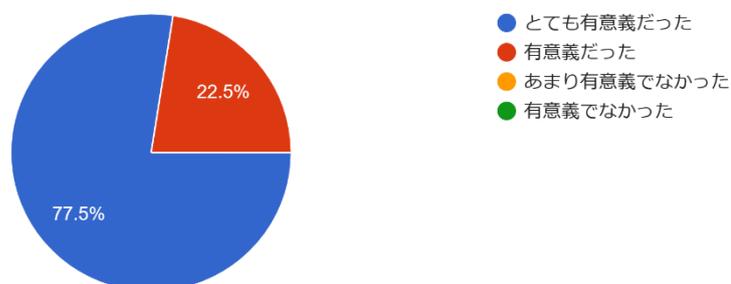
〈ご意見〉

- ・講話を聞き、特別支援教育の奥深さを実感しました。同時に、特別支援教育についてまだまだ知らない部分がたくさんあると感じました。
- ・菊池先生の今までのご経験を踏まえたさまざまな取り組みについて、お話を伺うことができ、今後の実践に参考になりました。ありがとうございました。
- ・長年の経験から大変だったことや本音をお聞きし、これからの教員生活に活かせそうな部分が多かったです。
- ・独りよがりの支援にならないようにすることの大切さを知ることができました。適切な指導方法だけではなく、連携して支援・指導する方法も学ぶ必要があると実感しました。

### 2 卒業生の話題提供・実践発表は有意義だったか (40件の回答)

卒業生の話題提供・実践発表の内容について、当てはまるものをお選びください。

40件の回答

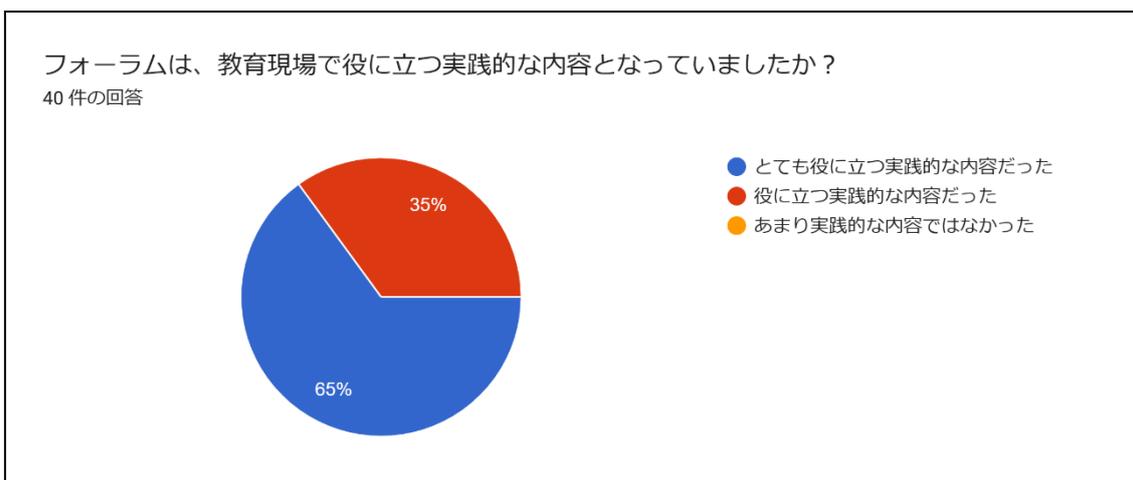


〈ご意見〉

- ・実際の先生方のお話を聞く機会はなかなかなく、全てが貴重なお話でした。来年から1年目となるので、とても勉強になりました。子どもの思いを大切に、取り組んでいくことの大切さをより実感できたと感じています。

- ・実際に授業で取り扱った内容や困ったこと、試行錯誤したことがわかり、自分の授業に取り入れ、チャレンジしていこうという気持ちになりました。
- ・実際の教育現場でどのような指導をされているかを勉強させていただきました。特に、主体的対話的で深い学びを実践するための具体的な方法を聴き、学習指導要領の実現を目指すことの大切さと大変さを学びました。
- ・教育現場で活躍されている、年齢が近い先生方のお話をお聞きして、来年度からの不安が少し軽減されたように思います。貴重なお話をありがとうございました。
- ・自分も実践したくなる実践報告でした。何事も自分から動いてたくさんチャレンジすること、子どもの思いを1番に考えることの大切さが改めて分かりました。
- ・実際の現場での生徒への指導や、学ばなければならない点などリアルな話を聞けて学びになった。

### 3 教育現場で役立つ実践的な内容だったか (40件の回答)



#### 〈ご意見〉

- ・実際に現場に立つ人たちから聞くお話はとても参考になりました。現場に立っているからこそわかる・感じるが多くあるのだと実感しました。令和の日本型学校教育など今なお教育の形は変化し続けているからこそ、その時その時をしっかりと見つめていきたいと思いました。
- ・司会、進行がスムーズなこと、オンライン参加の人にも配慮があり、とても良い環境で学べました。ありがとうございました。

「新しい生活様式」に即した内容から「新しい時代」に即した内容へ

「TFU 教育フォーラム 2022」実行委員長

富樫 進

令和4年12月3日(土)、通算第11回目となる「TFU 教育フォーラム 2022」がハイフレックス(オンライン・対面併用)形式にて開催されました。

当日は小春日和のもと、対面形式での参加者286名(うち、学内参加者=教員および在学生258名)、オンライン形式での参加者317名(うち、学内参加者301名)、総計603名の方々にご参加いただき、おかげさまで盛況のうちに終了することができました。

実行委員長としての立場から、今回のTFU 教育フォーラムの準備・運営をおおまかに振り返ったうえで、特筆すべき成果や今後の課題点について記していこうと思います。

### 1. 「TFU 教育フォーラム 2022」開催形式について

令和4年度の第1回実行委員会は2022年6月1日に行われました。新型コロナウイルス第7波を間近に控えた時期でもあり、教育フォーラムの開催が可能となった場合、①。昨年度(第10回)同様、全ての講演・発表をオンラインにて実施する「完全オンライン形式」、②。登壇者のみ国見キャンパスに招聘する「一部オンライン形式」、③。対面形式を基本としつつ、講演や発表の様子をオンラインで配信する「ハイフレックス形式」、④。コロナ禍以前と同じ要領で、講演や発表のオンライン配信を実施しない「完全対面形式」の何れが相応しいか、という点が、第一に決定すべき事項となりました。

この点に関しては、政府が国民の行動制限や経済活動の制限を主軸としたそれまでの新型コロナウイルス対策を見直し、ウイルスとの共存を前提としたいいわゆる「With コロナ」へと大幅な方向転換をおこなったことに伴い、本学でも行動指針が大幅に緩和されたことを受け、上記③「ハイフレックス形式」での開催を目指すことが決定されました。

ハイフレックス形式による開催の成否を分ける大きな課題のひとつが、オンライン参加者を対象とした環境整備に関する問題です。会場となる各教室の設備の問題もあり、対面参加者のようにストレスのない視聴環境をオンライン参加者に提供するには困難な点も多いのですが、PR課の全面協力のもとで一定度の成功を収めることができたと思います。

さらに、昨年度から合理的配慮の一環として始められた字幕の掲出に関しても、今年度はライブ配信用アプリ「OBS Studio」を用いることで昨年度からの改善を狙いました。

### 2. 中高英語分科会の新設について

昨年度(2021年度)より中等教育専攻に英語科コースが設置されたことに伴い、TFU 教育フォーラムにおいても今年度より中高英語科分科会を新設することとしました。

通常であれば発表者(話題提供者)は本学学部卒業生、学生実行委員は学部3年生の中からそれぞれ選出されるのですが、今年度は発表者を久保田佳克教授、学生実行委員を学部2年生3名(フルメンバー。ほか、幼保専攻の実行委員のお力を借りました)にそれぞれお引き受けいただいた上、学外から講師の先生をお招きしての開催となりました。

参加人数こそ少なめだったものの、英語科コースへの進学を検討している学部1年生や隣県の中学校にお勤めの（本学卒業／修了生ではない）現職教諭のご参加もあり、来年度以降のさらなる発展が期待される順調なスタートを切ることができたようです。

### 3. 各分科会の企画・運営について

中高英語分科会以外の各分科会においても、今年は積極的な動きが目立ちました。

今年度はフォーラム全体のテーマを昨年同様「ポストコロナへの志向—すべての子どもの確かな学びを目指して—」と決めました。その一方で、恐らくは各分科会チーフを中心に綿密な話し合いが行われたことで、それぞれの分科会が独自性の高い個別テーマを提示するに至りました。フォーラム全体の統一テーマと分科会毎の個別テーマそれぞれの位置づけ、また、両者の整合性をもたせるべきか否かという点についてはいろいろな評価が考えられ、今後議論すべき問題かもしれません。個人的には、各分科会スタッフによって主体的な企画・立案がおこなわれたことの象徴として、肯定的に評価したいと思います。

### 4. 広報活動、および次年度以降の課題点について

今回の教育フォーラムでは、中高英語分科会以外においても非卒業／修了生のご参加がありました。特に印象深いのは幼保分科会に高校生が参加されたことです。もしかすると教育フォーラムが高校生の進路選択の手がかりとしての役割を果たすのかも知れません。

また、今年度は光村図書出版から同社運営の Web サイト「全国研究会情報」への情報掲載のお申し出や、（お断りせざるを得なかったものの）本学卒業／修了生ではない現職教員の方からの登壇（話題提供）の可否についてお問い合わせを受けるなど、TFU 教育フォーラムの知名度が確実に高まっていることを実感する出来事がいくつかありました。

その一方で、卒業／修了生の参加者数は少数に留まっています。フォーラムの主目的の一つがリカレント教育にあることを重視すると、改善策を検討する必要があります。

「新しい生活様式」に即した開催形式の検討を出発点とする第 11 回 TFU 教育フォーラムは「新しい時代」に即したフォーラムの実現に資する数々の成果と課題を残しました。

本フォーラムが学内外に開かれた学びの場として、さらなる発展を遂げますように。

末筆ながら、貴重なお話しを賜りました講師・講評の先生方、保育・教育の現場における実践的話題をご提供下さった発表者の皆様に対しまして、改めて御礼申し上げます。

また、学内では教務課の佐々翼さんと笠原理子さん、昨年度に引き続き様々なご助力を賜りました PR 課・佐藤満明係長、Web ページの開設・更新をご担当下さった同課・梅津正輝さん、正門および西門の開閉門や必要となる備品をご準備下さった施設課の大石康弘係長・管財課の阿部直道さんはじめ本学職員の皆様、本当にありがとうございました。

そして、教育実習や授業・演習の合間を縫って打ち合わせに参加し、当日は力を合わせて積極的にフォーラム運営に携わって下さった学生実行委員の皆さん、お疲れ様でした。

来年度以降も TFU 教育フォーラムに対するより一層のご理解・ご協力をお願い致しつつ、御礼のご挨拶と代えさせていただきます。

TFU 教育フォーラム 2022」 学生実行委員名簿

本教育フォーラムは、各ゼミ代表者から選出された学生実行委員によって10月に学生実行委員会が立ち上げられ、多くの係を分担し運営されました。事前の準備や打ち合わせを綿密に行い、無事当日のすべてのプログラムを終えることができました。

担当	学籍番号	学生氏名	所属ゼミ	備考
委員長	20ER018	佐藤 駿介	浅川ゼミ	中高社 受付を兼任。
副委員長	20ET228	渡邊帆乃佳	山崎ゼミ	幼保 受付を兼任。
検温・誘導	20ET097	佐藤 亜純	河合ゼミ	幼保 記録を兼任。
	20ET169	橋本 七海	石森ゼミ	
	20ER030	武田 稜生	門脇ゼミ	中高社 記録を兼任。
	20ET068	日下 陽向	和 ゼミ	特支 記録を兼任。
幼保 受付	20ET105	佐藤 真優	河合ゼミ	幼保 記録を兼任。
幼保 司会進行	20ET083	今野さくら	高野ゼミ	
	20ET161	長澤 柊寧	石森ゼミ	
幼保 記録	20ET045	小川 千穂	平川ゼミ	
	20ET101	佐藤 花南	高野ゼミ	
幼保 Web PV	20ET132	高田 日向	青木ゼミ	
小学 A 受付	20ET136	高橋ことみ	渡会ゼミ	小学 A 記録を兼任。
	20ET142	高橋 佑芽	渡会ゼミ	
小学 A 司会進行	20ET096	佐藤 朝夏	加藤ゼミ	
	20ET208	森 宝	石原ゼミ	
小学 A 記録	20ET171	林 優衣	上條ゼミ	
	20ET178	福田 真菜	水野ゼミ	
小学 A Web PV	20ET133	高田屋海斗	三浦ゼミ	
小学 B 受付	20ET048	小野寺可純	水野ゼミ	小学 B 記録を兼任。
	20ET148	植木 聡史	今野ゼミ	
小学 B 司会進行	20ET023	武山依里香	伊勢ゼミ	
	20ET212	安川ちあき	熊谷ゼミ	
小学 B 記録	20ET015	市川 知佳	熊谷ゼミ	
	20ET186	星 愛華	佐藤(郷)ゼミ	
小学 B Web PV	20ET211	八島 伶奈	白井ゼミ	
中高社 受付	20ER016	五月女颯汰	安藤ゼミ	中高社 記録を兼任。
中高社 司会進行	20ER006	飯岡 孝太	朝倉ゼミ	
	20ER037	星 郁花	下山ゼミ	
中高社 記録	20ER005	遠藤 孝太	下山ゼミ	
	20ER010	長田 雄太	富樫ゼミ	

中高社 Web PV	20ER032	中島 駿平	中林ゼミ	
中高英 受付	20ET063	岸田 夏葉	君島ゼミ	幼保 記録を兼任。
	20ET109	志賀あかり	山崎ゼミ	
中高英 司会進行	21ER036	松本 芽生	高橋(久)ゼミ	
中高英 記録	21ER034	平塚 蓮	佐藤(恵)ゼミ	
中高英 Web PV	21ER002	會田 和	高橋(久)ゼミ	
特支 受付	20ET003	秋山紗弥香	高屋ゼミ	特支 記録を兼任。
	20ET175	平澤 歩実	黄 ゼミ	
特支 司会進行	20ET053	小山かほる	茂木ゼミ	
	20ET197	水江こゆき	大西ゼミ	
特支 記録	20ET040	大沼 寛季	大西ゼミ	
	20ER038	町田 龍司	庭野ゼミ	
特支 Web PV	20ET065	吉川 朋希	辻 ゼミ	

・ ・ TFU 教育フォーラム舞台裏 ・ ・



分科会進行に取り組む学生たち  
(第4分科会)



(第6分科会)



WEB サポート等に専念する学生たち  
(第2分科会)

TFU 教育フォーラムのあゆみ

実施月日/参加者数/特記事項	大会テーマ・主な内容等
<p>子ども教育フォーラム 2012 8月18日、参加者：300名</p> <p>卒業生のリカレント教育 として教育フォーラムを 開始</p>	<p>テーマ：つながりのある保育・教育を求めて</p> <p>第1部：基調講演 「教材でつながる、教材をつなげる」 東北福祉大学 西林克彦教授</p> <p>「保幼小連携の枠組み - 実際と展開 -」 神戸大学大学院 北野幸子准教授</p> <p>第2部：ワークショップ「ワールドカフェ in TFU」 担当者：三浦和美（子ども教育学科・教職）</p>
<p>TFU 子ども教育リカレント 講座 2013 10月19日、参加者：150名</p> <p>分科会形式の運営を開始</p>	<p>第1部：記念講演 「考えてみよう 眠りのこと ～どんな時に眠くて、どんな 時に眠くない？～」 東北福祉大学 水野康准教授</p> <p>第2部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：小石川秀一（子ども教育学科・教職）</p>
<p>TFU 教育フォーラム 2014 10月11日、参加者：155名</p>	<p>第1部：記念講演 「算数のたのしさ」 東北福祉大学 石原直教授</p> <p>第2部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：土生昭文（子ども教育学科・教職）</p>
<p><b>2015年4月 教育学部教育学科・大学院教育学研究科発足により共催実施</b></p>	
<p>TFU 教育フォーラム 2015 10月3日、参加者：800名</p> <p>初めて中央講師迎え開催 学科と大学院共催を開始</p>	<p>第1部：記念講演 「子どもも大人も居心地の良い学校、家庭、地域社会をめざ して」 教育評論家・法政大学教授 尾木直樹先生</p> <p>第2部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：熊谷和彦（初等教育専攻・小学校）</p>
<p>TFU 教育フォーラム 2016 11月6日、参加者：390名</p>	<p>第1部：講演 「特別支援教育の動向」 東北福祉大学 大西孝志教授</p> <p>第2部：分科会（保育対象・教職課程） 担当者：熊谷和彦（初等教育専攻・小学校）</p>
<p>TFU 教育フォーラム 2017 10月14日、参加者：100名</p>	<p>第1部：講演 「空がこんなに青いとは わたしの初人験」 東北福祉大学 土生昭文准教授</p>

	<p>第2部：分科会（保育対象・教職課程）          担当者：熊谷和彦（初等教育専攻・小学校）</p>
<p>TFU 教育フォーラム 2018          12月8日、幼保：323名          10月6日、教職：174名</p>	<p>大会テーマ：主体的・対話的深い学びを目指して 子どもの          学びをどう幅広く支援するか          大会テーマを設定し各分科会を実施。          中等部会新設。          担当者：今野和賀子（初等教育専攻・小学校）</p>
<p>TFU 教育フォーラム 2019          12月14日、幼保：427名</p>	<p>大会テーマ：主体的・対話的深い学びを目指して          子どもの学びをどう幅広く支援するか          10月12日、教職：台風19号により中止          担当者：浅川俊夫（中等教育専攻・社会）</p>
<p>TFU 教育フォーラム 2020          11月28日</p>	<p>大会テーマ：主体的・対話的深い学びを目指して          子どもの学びをどう幅広く支援するか          新型コロナウイルス感染症拡大により中止          担当者：高屋隆男（特別支援教育）</p>
<p>TFU 教育フォーラム 2021          12月4日、参加者：655名          感染症対策のためオンライン開催</p>	<p>大会テーマ：ポストコロナへの志向          —すべての子どもの確かな学びを目指して—          5分科会（幼保・小A・小B・中・特別支援）で開催          担当者：渡会純一（初等教育専攻・小学校）</p>
<p>TFU 教育フォーラム 2022          12月3日、参加者：603名          対面・オンラインハイフレックス方式による開催</p>	<p>大会テーマ：ポストコロナへの志向          —すべての子どもの確かな学びを目指して—          6分科会（幼保・小A・小B・中高社会・中高英語（新設）・特別支援）で開催          担当者：冨樫進（中等教育専攻・中高社会）</p>

・ ・ TFU 教育フォーラムにおける学びの姿 ・ ・



オンラインによる発表に学ぶ（第3分科会）



熱心に質問をする学生（第5分科会）

## 編集後記

既に丸三年の月日、世界は感染症という脅威にさらされ続けてきました。2022年になってから行動制限のない日々が戻ってきたものの、これから「新しい日常」をどう創出するかは、どの社会にもどの学びの場にも求められる課題となりました。

こうした社会事情を背景にして2012年から続く「TFU教育フォーラム」開催を検討する時期には、昨年度実施したオンライン方式の経験が大いに役立ち、3年ぶりとなる対面とオンライン併用のハイフレックス方式による開催が実現しました。

教職10年を超える卒業生の発表や大学院生による発表、さらには遠隔地からの発表など、対面とオンラインによる開催によって多様な視点での学びを創出することができました。また、数多く発表された授業におけるICT機器活用では、子供たちとの学び合い・交流が基本にあることを改めて実感する機会になりました。この先も見通しがきかない日々は続くかもしれませんが、このTFU教育フォーラムで学び合ったことをそれぞれの学びの場に持ち帰って実践を積み重ねることがポストコロナへの具体的な志向になることと思います。

本教育フォーラム開催に当たりましてご協力いただきました講師の先生方、関係各位に心より感謝申し上げます。

なお、本報告書は、東北福祉大学教育学科ホームページにもPDFとして掲載しておりますので、是非ご活用いただければ幸いです。

記録集総括：三浦 和美

# 「TFU教育フォーラム2022」記録集

2023年1月20日発行

東北福祉大学教育学部/東北福祉大学大学院教育学研究科

